

【平成24年度 研究のまとめ】

目 次

主題設定の理由	1
主題に関する構造	2
幼稚部の研究	3
小学部の研究	14
中学部の研究	31
高等部の研究	38
寄宿舎の研究	50

【学校研究主題】

学力の向上を目指した取組

1 研究主題について

(1) 研究主題設定の理由

現在、変化の激しい社会を生きる子どもたちには、「生きる力」を育むことが必要とされている。とりわけ「生きる力」を支える柱の一つである「確かな学力」の育成を図ろうとする考え方は、平成8年の中央教育審議会答申以来、一貫したものとなっている。

文部科学省は、今回の学習指導要領改訂に伴う中央教育審議会の中で「確かな学力」とは、知識・技能に加え、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力としている。また、その「確かな学力」を飛躍的に向上させるための総合的施策として平成15年度から『学力向上アクションプラン』を実施し、個に応じた指導の充実、学力の質の向上、個性・能力の伸長、英語力・国語力の増進を図る取組を推進している。学力低下が叫ばれる学校教育において、揺るぎない基礎・基本の定着、思考力・表現力・問題解決能力の向上、生涯にわたって学び続ける意欲、得意分野の伸長、旺盛な知的好奇心・探求心が強く求められているのである。

近年、聾学校においては、全国的に幼児児童生徒の減少、障害の重度・重複化、進路の多様化等が急速に進んでいる。特に聾学校の今日的課題として、早期教育と適性就学指導、障害の重度・重複化に対応した指導の在り方、多様な進路選択を指向した基礎学力の向上、学科再編や専門教科・科目の設定の改善、厳しい雇用情勢並びに職場定着率の低下、コミュニケーション手段等に関する諸問題が指摘されている。

本校では「聴覚口話法を基盤として言語力・コミュニケーション能力・学力の向上を図り、豊かな感性と心身の調和のとれた人間性を培い、『生きる力』を身に付けさせるとともに、自立し、社会の発展に貢献できる人間を育成する」ことを教育目標として、幼稚部から高等部専攻科まで教育を行っている。

今回の学習指導要領改訂においては、改訂のねらいを十分に踏まえ、各学部で教育課程を編成している。また、各教科においては、一昨年度より教科等部会を開き、一貫性の在り方について検討され、基礎学力・応用力の向上、言語力・語彙力の向上等が課題とされた。このことより、今年度から表現力や語彙力の拡大を目指し、「書く指導」に視点を当て、各教科で取組が進むこととなっている。このように、「ことば」や「学力の定着」については、本校の往年の課題であり、これまでも様々な取組がなされてきているのである。

そこで、今年度より3年間の学校研究テーマを「学力の向上を目指した取組」とし、それぞれの具体的な取組を副題として設定することとした。その中で、各発達段階での学力の捉え方をまとめ、「生きる力」としての学力の向上を図っていきたいと考える。

※ 高等部においては、特別支援教育に関する教育課程の編成等についての実践研究として「専門高校等との交流授業やデュアルシステムを活用した教育課程の編成」を研究テーマとし、高等部単独での研究を進める。

(2) 研修主題に関する構造

【学習指導要領】

新しい学習指導要領では、生きる力をはぐくむことを目指し、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うために、言語活動を充実させる。

【校訓】

よく話し ことばで考える 豊かな子

【学校教育目標】

聴覚口話を基盤に、個に応じたコミュニケーション手段を用いて、言語力、コミュニケーション能力、学力の向上を図り、「生きる力」を身に付けた、心豊かでたくましい人間を育成する。

【めざす幼児児童生徒像】

- ・ 健康な身体と豊かな心をもつ子ども
- ・ 話のわかる、話のできる子ども
- ・ 自分の考え、すすんで学習に励む子ども
- ・ きまりを守り、規則正しい生活のできる子ども
- ・ すすんで働き、みんなと仲良くできる子ども

【拡大教育課程係会】（教科等部会まとめ）

基礎学力の向上、応用力の向上
言語力・語彙力の向上
言語の理解を促す
英検・漢検への取組 など

教育課程 実態把握
評価シートの活用 など

「書く指導」を通して、
表現力や語彙の拡大等を目指す

これまでの研究実践の成果と課題（テーマ研修係反省）

- ・ 確かな日本語力の育成のための研究（全体研究）
（平成18年度～平成20年度）
- ・ 「個別の指導計画」をキーワードに各学部での研究
（平成21年度～平成23年度）

【学校研究主題】

学力の向上を目指した取組

【各部の研究サブテーマ】（平成24年度～平成26年度） ※高等部のスパンは未定

幼稚部	「豊かなことばで表現する子どもを育むかかわり方の研究」 ～ 口声模倣の指導に視点を当てて ～
小学部	国語科「書く力」を育てる指導を通して
中学部	国語力を育てるための取組
寄宿舎	生活の中で豊かな言葉、知識を育てる取組
高等部	専門高校等との交流授業やデュアルシステムを活用した教育課程の編成

<平成24年度の幼稚部学部研究について>

1 研究主題

「豊かなことばで表現する子どもを育むかかわり方の研究」

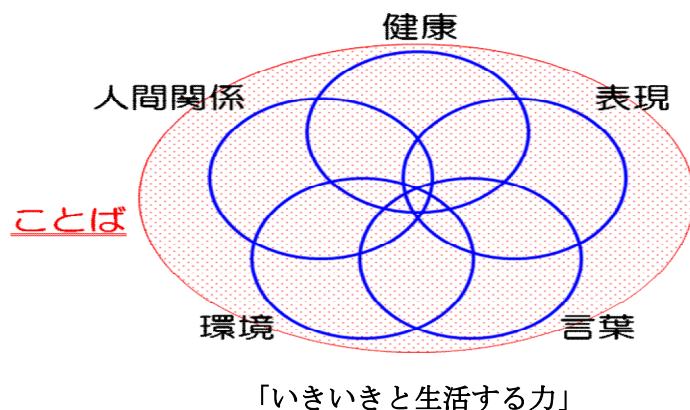
～ 口声模倣に視点を当てて ～

2 研究主題設定の理由

これまで幼稚部では、「一人一人の豊かなことばの獲得を目指して」というテーマのもと、共感的なかかわりや発問、口声模倣といった教師のかかわり方に視点を当て、研究授業やビデオ研修等を通して研究を進めてきた。成果としては、発問や口声模倣についての一人一人の意識が高まり、実践することの大切さを感じることができたことなどが挙げられた。その反面、課題としては、実際の保育や指導につながる客観的な評価が明らかにならず、次の保育に生かされたかどうかの検証ができなかったことなどが挙げられた。

本年度から、全体研究では「学力の向上を目指した取組」というテーマのもと、3年間で研究を進める。0～5歳の子どもが在籍する幼稚部では、「学力」を「いきいきと生活する力」と捉えていく。乳幼児期における「いきいきと生活する力」は、心や体やことばの育ち、身近な人・環境とのかかわりなどの中で、相互に関連し合いながら獲得されていくと考える。中でもことばは、生後間もない乳児が大人にあやされて笑顔になったり、指差しで自分の気持ちを表出したりする前言語段階、単語レベルで表出する段階、2語文以上の構文で思考したり、人とのやり取りをしたりする段階など、発達での段階は様々だが、どの段階においても生活全般に深くかかわっている。子どもたちが生活の中で言いたいことを自分のことばで表現できるようになることが、「いきいきと生活する力」につながっていくと考え、豊かなことばで表現する子どもを育むかかわりの一つの方法として、口声模倣に視点を当てて研究していく。

人は生まれたときから周囲の大人が話すことばを聞き、次第に真似て声を出し始める。自分で発したことばを自分で聞くことで、さらに次への発声へとつながるフィードバックを行いながらことばを獲得していく。しかし、聴覚に障害のある子どもは、そのフィードバックする力が弱いために、ことばを覚えることが難しい場合が多い。そこで、意図的に口声模倣を誘うことが、子どもの言いたいことばを聞いたり話したりする機会を増やし、自分のことばで表現する力を身に付けることにつながると考える。口声模倣の誘い方が、自分のことばで表現する力に影響を与えたと考え、定期的に保育のビデオを具体的な観点に沿って検証し、課題と改善策を明確にする。この研究を通して、子どものよりの的確な実態把握をする力や子どもの言いたい気持ちを見抜く力が身に付き、教師主導ではなく子どもの発言中心の保育を展開することができるのではないか。



3 研修日程

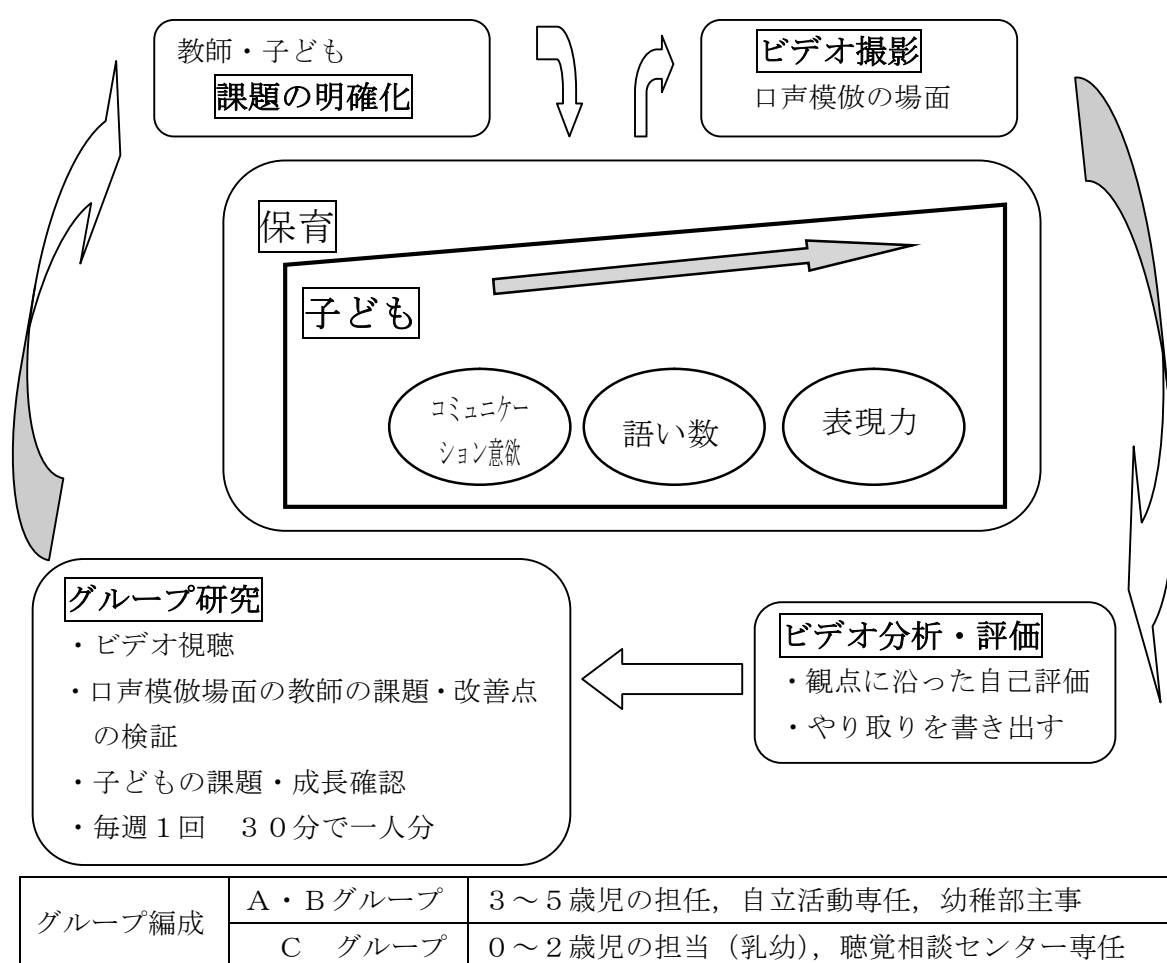
月	日	曜		内容	
4	17	火	学部	学部テーマ研修係会①	
	24	火	学部	本年度の幼稚部の研究テーマについて	
5	8	火	学部	学部テーマ研修係会②	
	22	火	学部	本年度の研修の説明	
	29	火	学部	学部研究について 具体的な進め方・方法	
6	19	火	学部	ビデオ研究①（グループごと）	↑
	26	火	全体	校内参観反省	
7	17	火	学部	ビデオ研究②（グループごと）	
	27	金	全体	聴覚障害教育研修	ビデオ研究の設定日の他に、グループで日程調整し、1か月ごとにグループ全員分のビデオ研究を行えるようにした。
	31	火	全体	聴覚障害教育研修	
8	7	火	学部	ビデオ研究③（グループごと）	
9	4	火	学部	ビデオ研究④（グループごと）	
	18	火	全体	全日聾リハor学部研修	
10	2	火	学部	ビデオ研究⑤（グループごと）	
	23	火	学部	ビデオ研究⑥（グループごと）	
	30	火	全体	九聴研リハ	
11	13	火	学部	ビデオ研究⑦（グループごと）	
	27	火	学部	ビデオ研究⑧（グループごと）	
12	18	火	学部	ビデオ研究⑨（グループごと）	
	25	火	全体	九聴研・全日聾研報告会	
1	15		グループ	※ 各グループでまとめの作業へ ・ 1月15日～25日(金) ビデオ研修記録用紙に具体的な課題や改善策を記入(事例) 6月のビデオを起こした分 1月以降のビデオを起こした分	
	25				
	29	火	学部	グループでビデオ研修のまとめ ※ 「ことばのあゆみ」データ打ち込み	
2	31	水	学部	グループごとのまとめ	
	12	火	学部	本年度の研究のまとめ	
	19	火	全体	人権同和教育	
	20	水	学部	最終報告会（ビデオ研究を通して）	
3	26	火	学部	本年度の研究のまとめ（研修係→学部）	↓
	5	火	学部	本年度の研究のまとめ（学部検討）	
	14	木	学部	本年度の研究のまとめ（学部報告）	
	19	火	全体	年度末報告	

4 研究の内容・方法

(1) ビデオ研究

口声模倣を誘っている場面を研究するために、3～5歳では子どもが言いたいことを発言しやすい、おはようの時間でのトピックス場面を中心に、0～2歳では集団保育でやり取りをしている場面を中心にビデオ撮影する。ビデオを使って研究することで、保育者自身が客観的に保育を振り返ることができるとともに、口声模倣の場面を繰り返し見返すことができ、細かく検証することができる考えた。

ビデオ研究を通して、どのように口声模倣を誘っていけばよいのかが具体的に分かり、子どもの課題に合わせて指導することで、子どもたちの自発的なことばをより広げ、子どもの気持ちや場の状況に合ったことばで表現できる機会を増やしていきたい。そうして、子どもが日常の場面でも豊かにコミュニケーションできる力をつけていくことができると考える。



(2) 子どもの変容の分析

ア 0～2歳児

事例対象児について、視線の共有、指差し、身振りサイン、表出できる言葉という視点で、年度末での成長をまとめた。

イ 3～5歳児

学期ごとに「ことばのあゆみ」*1をチェックし、学期ごとの獲得語い数の変化（表3）と、年度末での獲得語い数の品詞のバランス（表4-A、表4-B）を調べた。

*1:「ことばのあゆみ」は、『くもんの絵ことばじてん』（くもん出版）を参考にし、本校で作成したものである。幼児（主に2～6歳児）の日常生活の上で基本となる約1,500語を収録している。

5 研究の実際

(1) ビデオ研究

0～2歳と3～5歳に分けて口声模倣を評価する観点を定め（表1）、保育者が観点に沿って口声模倣を誘っている場面（1分～3分程度）を評価し、グループ研究で検証した。

表1

旧観点（6月～10月）	新観点（11月～2月）
A・Bグループ（3～5才）	
A：口声模倣を誘っているか （同時模倣，時差模倣） B：文節数が適切か （子どもの実態に合っているか） C：子どもの意図をくんでいるか D：正しい構文を意識しているか （例：助詞，動詞の活用） E：品詞（動詞，名詞，形容詞）のバランス （語いの増加，拡充模倣） F：発音	A：口声模倣を誘ったところ （同時模倣，時差模倣） <u>同時模倣 回，時差模倣 回</u> B：文節数は適切だったか （子どもの実態に合っているか） <u>文節数： 文節</u> C：子どもの意図をくんだ言葉，押さえない言葉の口声模倣であるか D：構文は整っていたか （例：助詞，動詞の活用） E：意識した品詞や言い回し F：発音を意識した口声模倣だったか，キューサインや発音誘導の活用
Cグループ（0～2才）	
A：ミラリングをしているか B：モニタリングをしているか C：身振りを誘っているか D：発声・ことばを誘っているか E：誘っている身振り・発声・ことばは適切か（子どもの実態に合っているか） F：子どもの意図をくんでいるか	A：ミラリング B：モニタリング C：身振りの誘導 D：発声・ことばの誘導 E：実態の適切さ F：子どもの意図

ア 初回（6月～）は，口声模倣や意識してかかわっている場面を中心に，2～3分程度ビデオを起し，それを「ビデオ分析シート」に記載。旧観点で「ビデオ分析シート」を分析し，「ビ

デオ記録用紙」へ記入。それをもとにグループ研究を行った。全員1回ずつ実施。

イ 11月：1～2分程度ビデオを起こし、そのやり取りを記載した「ビデオ分析シート」を作成。新観点で起こした部分を分析し、「ビデオ研究記録用紙」へ記入。それをもとにグループ研究を行った。全員1回ずつ実施。

ウ 1月：グループの事例対象児について、1回目（6月）のビデオを新観点で分析し、「ビデオ研究記録用紙」に記入。グループで新観点に沿って課題や具体的な改善策について話し合った。

エ 事例対象児について、グループごとに6月と12月の教師や幼児の変容、教師の今後の課題について検討し、まとめた（表2-A、2-B、2-C）。

オ 年度末に報告会を実施し、各グループ1事例ずつのビデオ視聴と報告を行い、学部全体で共通理解を図った。

（2）子どもの変容の分析

ア 0～2歳児

（ア）視線の共有

6月は提示した教材等への興味が強く、人に向ける視線は少なかった。現在では、提示した教材等に対する気付きを担当や母親に伝えたいという思いが育ち、視線を合せて共感できる場面が増えた。

（イ）指差し、身振りサイン

6月は、「あ」という発声と指さしで気付きや意思を伝えていた。現在では指差しと共に、ごく身近な人やものの身振りサインが身に付き、伝わる喜びを感じられるようになっている。

（ウ）表出できる言葉

6月は、自発語として表出できる言葉はなかったが、現在では「ママ」「バイバイ」「あお」など数語出てきた。口声模倣が定着しつつあり、音声や口形を意識しながら言える言葉も増えてきている。

イ 3～5歳児

（ア）学期ごとの獲得語い数の変化：全13名分（表3）

（イ）獲得語い数の品詞のバランス

（表4-A：Aグループ対象児、表4-B：Bグループ対象児）

6 研究の成果と今後の課題（次年度へ向けて）

（1）ビデオ研究について

ア 成果

- ・ 口声模倣については、平成24年度の幼稚部教育課程をもとに職員で共通理解を図ったが、ビデオを視聴して研究することで、具体的な口声模倣の誘い方や、子どもの課題のとらえ方などについて実践的な面でも共通理解を図ることができた。幼稚部を初めて経験する職員も、ビデオを見て学んだ口声模倣の誘い方を、すぐに自分の保育で生かすことができた。
- ・ グループ内で異年齢の子どもの様子を見ることで、前言語段階から言語段階における口声模倣の様子を知ることができた。

- ・ 少人数でグループ研究を行えたことで、1ヶ月に一度はグループ全員の保育を研究することができ、それぞれの保育を検証する回数を確保できた。
- ・ 口声模倣の観点を設定してビデオを振り返ることで、話題を焦点化でき、細かく保育を検証することができた。
- ・ ビデオ研究を積み重ねることで、口声模倣の誘い方を検証するP（計画）D（実践）C（評価）A（改善）のサイクルが機能し、年度初めと終わりを比較すると、子どもの表現レベルの成長が確認できた。教師の口声模倣の誘い方の変容が子どもの表現レベルの成長に重要な役割を果たしていることが検証できた。
- ・ 口声模倣は子どもの表現レベル向上を図るための有効な手段の一つであることを共通理解することができた。

イ 課題と次年度に向けて

- ・ 同じ年齢の子どもと比較をする機会がもてなかった。中間報告会を実施し、他のグループの実践や研究内容について共通理解できると、縦の成長だけでなく、横の広がりや深まりについても研修することができると考えられる。
- ・ 口声模倣のより具体的な誘い方について検証するのであれば、個別指導の場面を扱って研究する方が、口声模倣を誘う場面も多く、見やすい。
- ・ 子どもの語いを増やすために、ビデオ研究と平行して、子どもの表現レベルの質や量を定期的に確認すると、明確な課題をもって指導することができるのではないかな。
現在行っている検査の結果を有効に活用できるようにし、「ことばのあゆみ」やその他の資料等を使って、客観的にことばの定着が評価できるような方法を探っていきたい。
- ・ 研究方法の評価・改善を10月に実施した。もう少し早い段階で行い、新しい研究方法で取り組む時間を確保していきたい。
- ・ さらに保育に生かすことができる評価ができるように、ビデオ研究の観点の見直しが必要。0～2歳児では保育の中に含まれる保護者支援について、3～5歳児では複数の観点到当てはまる内容や、観点到ない「音数」「音韻」「口形」などをどのように評価し検証するのか、口声模倣に関してより具体的に全体が評価できるような観点到にしていきたい。

（2）子どもの変容の分析について

ア 成果

- ・ 「ことばのあゆみ」をもとに、年度末での獲得語い数の品詞のバランスを調べたことで、子ども一人一人の実態を確認することができた。

イ 課題と次年度に向けて

- ・ 0～2歳児の前言語段階の子どもの変容を教師や保護者が共有できるチェックリストがないため、評価が主観的になってしまう傾向がある。チェックしやすく、客観的に評価できるリストを作成していきたい。
- ・ 「ことばのあゆみ」での獲得語い数の品詞の確認を行ったのが年度末だったため、普段の保育に生かすまでに至らなかった。品詞の偏りに対して、意識をしながら保育を進めることができるように、学期ごとに確認をしていきたい。

- ・ 「ことばのあゆみ」に記載している語いの品詞数自体に偏りがあり，個人での獲得語い数の増加などをチェックすることはできるが，客観的なデータとして参考程度にとどめた。今後，それを補うためのチェックシートや検査などを検討する必要がある。

7 おわりに

本年度は，「豊かなことばで表現する子どもを育むかかわり方の研究」という研究主題のもと，口声模倣に視点を当てて研究を進めた。

この研究に取り組んだことで，子どもの実態に合った口声模倣を誘えるようになり，子どもの表現力にも変容が見られた。豊かなことばで表現できる子どもを育てるために，口声模倣が有効な手段の一つであることが確認できた。

今後も，いきいきと生活する子どもを育むために，教師のかかわり方について研究を深めていきたい。

表2-A ビデオ研究を通して まとめ

(Aグループ)

教 師 の 変 容 ※今後の課題	子 ども の 変 容
A：口声模倣を誘ったところ（同時模倣，時差模倣）	
口声模倣が習慣になり，言葉そのものだけではなく，「ん？」のような間を作って模倣を誘う場面も出てきた。口形を見せて，その違いを見せようと意識するようになった。 ※ 本児が言いたいことを全部言い終わってから，助詞を入れた3文節文程度で時差模倣を誘う。	教師が胸に手を当てて見せると声が出る（頭声）段階から，口声模倣を誘われていることが分かり，口形をよく見て，3文節文以上の模倣ができるようになってきている。
B：文節数は適切だったか（子どもの実態に合っているか）	
単語レベルの同時模倣から，1～2文節文で模倣を誘うようになってきている。本児が言いたい言葉の表現を変えながら模倣を誘うようになった。 ※ 3文節文以上で助詞を入れて誘った口声模倣を誘う。単語レベルでしっかり言えるような言葉を選び，時差模倣を誘いながら定着を図る。	- 身振りでの表出が中心で，声が出ても頭声だったが，1～3文節の同時模倣・時差模倣ができるようになってきている。 - 単語の音数は3音程度までだと一息で言うことができる。
C：子どもの意図をくんだ言葉，押さえた言葉の口声模倣であるか	
教師主体の言わせたい言葉から，子どもの気持ちをくみ取って言語化し，ゆっくり聞かせ模倣を誘うようになった。 ※ 細かな動作や気持ちの言語化をして口声模倣を誘う。	名詞や動作そのものが言葉になっていて，教師がそれを言葉に変えたり，教師の質問に答えたりしていたものが，気持ちを声に出して伝えようとし，その言葉を口声模倣できるようになってきた。
D：構文は整っていたか（例：助詞，動詞の活用）	
- 単語をしっかり言えるように，何度も模倣を誘っている。まだ助詞を入れて意識を高めようとする構文が少ない。 - 一問一答でのやりとりをしている。 ※ 助詞を指文字で提示し意識した構文にして文として模倣できるようにする。	自発的に助詞「～が」を入れた3文節文で話すようになった。
E：意識した品詞や言い回し	
子どもの気持ちを言語化し，いろいろな言い方で模倣を誘うようになった。やりとりができるようになり，自然な話しかけが増えた。 ※ 自発語の品詞を増やす。動詞の活用を意識した構文を提示する。	- 色の名前やキャラクターの名前など名詞が中心だったが，擬音や感嘆詞にも声を伴うことが分かり，模倣して声を出すようになった。 - 口形を意識できるようになり，語尾の変化に気付けるようになった。
F：発音を意識した口声模倣だったか	
口形のの違いで，母音レベルの誘導ができるようになったが，発音まで扱っていない。 ※ 唇や舌の動きなど，発音要領の指導も行い，定着につながるようにする	キューサインや発音誘導の活用 口形をよく意識するようになり，口形を合わせて，音韻にも気を付けて模倣できるようになった。

表2-B ビデオ研究を通して まとめ

(Bグループ)

教 師 の 変 容 ※今後の課題	子 ど も の 変 容
A：口声模倣を誘ったところ（同時模倣，時差模倣）	
・ 最後まで待つように促せるようになった。 ・ 同時模倣ではなく，時差模倣を意識して誘うようになった。 ・ 時差模倣の回数が増えた。（0→7） ※ 時差模倣で誘う際に，口形や助詞のヒントを出さずに全文を言わせるようにする。	・ 時差模倣が誘導できるようになった。
B：文節数は適切だったか（子どもの実態に合っているか）	
・ 提示する文が長かったが，実態に合った文で提示できるようになった。 ・ 実態把握ができるようになり，目標が明確になった。（2→3文節文） ・ 文節数を指で示すなど，子どもに分かりやすく伝えられるようになった。 ※ 提示する文の文節数を考えながらも，話の質を広げられるように，品詞なども考えて文を整えていくようにする。	・ 時差模倣できる量が，2文節文から3文節文に増えた。
C：子どもの意図をくんだ言葉，押さえた言葉の口声模倣であるか	
・ 子どもの意図や実態を考えながら，違う言い回しなども口声模倣で誘うようになった。 ※ 子どもの気持ちや表現を受け止める余裕をもっていきたい。その上で口声模倣はきっちり返すように求めたい。	
D：構文は整っていたか（例：助詞，動詞の活用）	
・ 助詞を意識付けるため，必ず指文字で示すようにしている。 ※ 助詞によって意味が違う文章になることも，しっかり押さえるようにしていく。	・ 正しい2文節文を言えるようになった。
E：意識した品詞や言い回し	
・ いろいろな表現を提示できるようになった。（「～から」「～しちゃった」） ※ 家庭と連携し使って欲しい品詞や言い回しを何度も使うようにしていく。	・ 語尾にいろいろな表現を使えるようになった。（「～よ」→「～してしまった」「～しちゃった」）
F：発音を意識した口声模倣だったか キューサインや発音誘導の活用	
・ 分からない言葉はキューサインや声だけで示し，言葉を誘導するようになった。 ※ キューサインを覚えるように促し，発音誘導で使うようにする。	・ 単語は2音から4音に増えた。 ・ 音の数や後続母音など，言葉を正しく使えるようになっている。

表2-c ビデオ研究を通して まとめ

(Cグループ)

教 師 の 変 容 ※今後の課題	子 ども の 変 容
A : ミラリング	
子どもの段階としてミラリングをする機会は少なかったが、モニタリングと併せて、子どもからの表出を真似ようとする意識は高まった。	
B : モニタリング	
子どもの落ち着かない動きを抑える意識でかかわっていたが、気付きや声を出す意欲を受け止め、モニタリングを意識するようになった。	「あーあー」などの発声ばかりで落ち着きがなかったが、教師と目が合う時間が長くなり、落ち着いて保育に参加できることが増えてきている。 - 教師の発言を逆に真似る習慣がつき、口声模倣ができる関係ができてきている。
C : 身振りの誘導	
身振りを誘う場面より、発声を誘う場面が多くなってきている。 ※ 意味を理解するためには身振りも不可欠である。子どもの実態や誘うタイミングなどをより細かく意識し、ことばの拡充につなげたい。	身振りのみの表出から、発声が伴う表出に変化してきている。
D : 発声・ことばの誘導	
誘導したいことばを意識して発言するようになり、その回数も増えてきた。 ※ 口声模倣は習慣化しつつあるが、ことばを単に模倣させるだけではなく、考えて言わせたり、繰り返し使う場面を設定したりするなど、ことばの定着に努める意識が必要。	- 口声模倣の習慣が定着してきていて、教師の発言を自発的に真似ることができるようになってきている。 「あ」の発声だけでなく、「ま」などの母音以外の音が出るようになってきている。また、ごく身近なものを名前で伝えようとする意識が育ってきている。
E : 実態の適切さ	
TTでの指導をするに当たって、口声模倣のレベルや注意すべき点などの共通理解を密に図るようになった。 ※ 集団での保育のため、子どもそれぞれの課題を保育内におさえるのが不十分になりがちである。個々のより細かい実態把握をした上で、教材やおさえることばなどを選定し、TTの利点を生かした保育を進めたい。	
F : 子どもの意図	
子どもからの表出を見逃さないように意識し、共感することに努めるようになった。 ※ 自分の思いを教師に伝えたい段階なので、それを受け止めつつ他児にも広げていく。そうすることで、友達にも興味をもち、友達を見本にして伝える手段を学んでいけるようにしていきたい。	子どもの思いを保護者が受け止め、代弁できるようになったことで、親子で楽しみながら保育に参加できることが増えてきている。

表 3

学期ごとの獲得語い数の変化

歳		H24. 3	H24. 7	H24. 12
3	A児	360	675	828
	B児	0	0	422
4	C児	919	1034	1137
	D児	974	1097	1163
	E児	585	716	885
	F児	135	144	554
	G児	15	78	99
	H児	536	694	863
	I児	693	789	915
5	J児			
	K児	1087	1189	1264
	L児	400	498	589
	M児	384	411	428

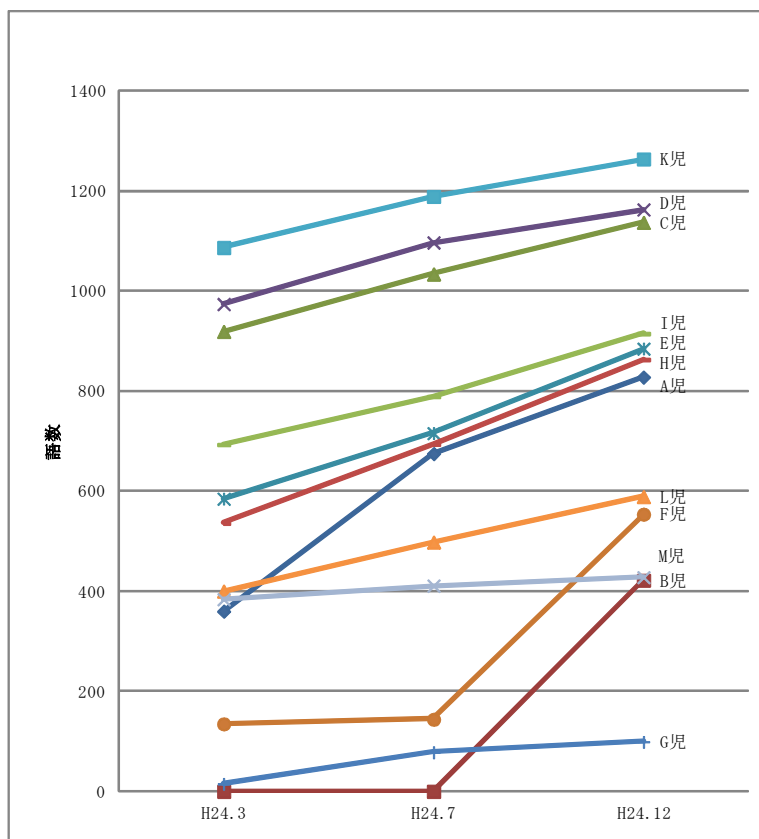


表 4 - A (3 歳児)

獲得語い数の品詞のバランス

品詞名	全数	H24. 3	達成率	H24. 12	達成率
名詞	1276	0	0.0%	303	23.7%
動詞	134	0	0.0%	53	39.6%
形容詞	69	0	0.0%	43	62.3%
形容動詞	7	0	0.0%	5	71.4%
副詞	28	0	0.0%	5	17.9%
その他	30	0	0.0%	13	43.3%
合計	1544	0	0.0%	422	27.3%

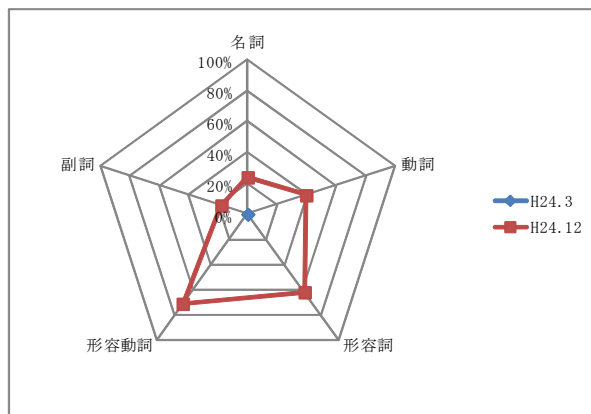
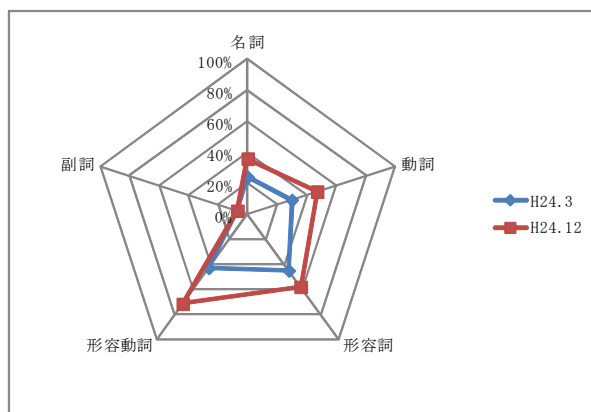


表 4 - B (5 歳児)

獲得語い数の品詞のバランス

品詞名	全数	H24. 3	達成率	H24. 12	達成率
名詞	1276	307	24.1%	457	35.8%
動詞	134	40	29.9%	63	47.0%
形容詞	69	31	44.9%	40	58.0%
形容動詞	7	3	42.9%	5	71.4%
副詞	28	2	7.1%	2	7.1%
その他	30	17	56.7%	22	73.3%
合計	1544	400	25.9%	589	38.1%



【小学部の研究】

1 研究主題

学力の向上を目指した取り組み
～国語科「書く力」を育てる指導を通して～

2 主題設定の理由

(1) 小学校国語科の目標から

中央教育審議会答申における国語科の改善の基本方針の中で、国語科については、その課題を踏まえ、「実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること等に重点を置いて内容の改善を図る。」と示された。

国語科の目標としては以下のことが示されている。

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め、国語を尊重する態度を育てる。

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成することを重視していることから、「表現する能力」を目標の最初に位置づけていると考えられる。

(2) 学校教育目標から

本校では、学校教育目標として「聴覚口語法を基盤に、個に応じたコミュニケーション手段を用いて、言語力、コミュニケーション能力、学力の向上を図り、『生きる力』を身に付けた、心豊かでたくましい人間を育成する」を掲げている。

昨年度の研究の反省から、学校全体で「ことば」「学力の定着」が課題であることがあがっている。そこで、学部や教科における「ことば」「学力」をテーマにすれば、学校教育目標の達成に近づくことができると考える。

(3) 児童の実態から

児童の実態として、文字や語の誤表記、文や文章レベルでの文法的な誤りなど、表現全般に課題が見られる。また、書くことについても苦手意識を持っている児童が多い。「書く力」に焦点をあてて研究をすすめ、共通理解・実践を行うことで基礎的な内容の定着を図り、書くことに対しての苦手意識をなくしていく必要があると考えられる。

3 研究の内容・方法

(1) 研究主題のとらえかた

「学力」の中で、本校の児童にとって特に課題となる、「書く力」に焦点をあてる。基礎的な技能の定着を図り、「書く力」を育てるための手だてについて研究を進めていく。

(2) 研究の仮説

- ・ 「書くこと」の基礎・基本を明確にし、系統性を重視した指導を行ったら、子どもたちの「書く力」を高めることができるのではないか。
- ・ 言語環境を整理し、語彙を増やすための工夫をすれば、「書く力」を高めることができるのではないか。

(3) 研究組織について

ア 理論的研究

- ・ 書くことの基礎・基本についての分析。
- ・ 系統性が見えるようにする。

イ 実態調査・言語環境の整備

- ・ アンケート作成などによる情報収集、実態調査。
- ・ 環境の整備。（設営計画）

ウ 授業を通して

- ・ 課題となる語句を拾い上げる。
- ・ 研究授業・授業研究。（授業研究の進め方の検討）
- ・ ワークシート作成。

4 研究経過

(1) 日程

日付		曜日	内 容
4	17	火	研修提案
	24	火	研修確認、係分担、各班話合い
5	8	火	原稿確認、各班話合い
	22	火	全体研修（小学部の研修説明）
	29	火	各班活動
6	5	火	報告（各班が取り組む方向性等の確認）
	20	水	研究授業。授業研究は22日（金）に幼小合同研修で行った。
	26	火	公開授業反省・各班活動
7	3	火	各班活動
	17	火	報告（夏休みにすること）
	24	火	全体研修（人権同和教育研修）
8	7	火	各班活動
	21	火	各班活動
	28	火	報告（2学期の取り組みについて）
9	4	火	各班活動
	18	火	全体研修（不祥事根絶研修）
	25	火	各班活動
10	2	火	各班活動
	16	火	研究授業・授業研究
	23	火	各班からの報告（中間まとめ）
	30	火	全体研修（九聴研リハーサル）
11	13	火	研究授業・授業研究
	27	火	各班活動
12	11	火	各班からの報告（2学期のまとめ）
	18	火	各班活動
	25	火	全体研修（全日聾・九聴研報告会）
1	29	火	各班活動
2	5	火	各班からの活動報告・研修振り返り
	19	火	全体研修（人権同和教育研修）
	26	火	原稿チェック
3	5	火	次年度の研修について
	19	火	全体研修（報告会）

(2) 内容：具体的な研究内容・方法

ア 理論的研究

- (ア) 「書くこと」の基礎・基本を明確にし、系統性を重視した指導を行うために、国語の指導書から指導内容の「書くこと」に関する事項を拾い上げ、系統性を考えた。系統の分け方については、「国語科の学習指導要領解説国語編」国語科の目標及び内容を参考とし、4つの系統を定めた。（語句、構

成、表記、文字)

- (イ) 拾い上げた指導内容を4つの系統に分類することで、「書くこと」の基礎・基本を押さえつつ、系統性を見ることができるようにした。

イ 実態調査・言語環境の整備

- (ア) アンケートを作成し、実態調査を行った。
(イ) 言語環境を整えるための取組を考察し、検討・計画した。

ウ 授業を通して

- (ア) 1年生の教科書から課題となりそうな語句を拾い上げ、一覧にした。
(イ) 2年生と4年生において、1つの単元を取り上げ、基礎・基本の語句を使って短文作りなどのワークシートを作成し、授業の中で活用できるようにした。

5 研究の実際

(1) 理論の研究

ア 語句に関すること

言葉の特徴やきまりに関する事項(学習指導要領から)

(ア) 第1・2学年

- ・言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと。
- ・音節と文字との関係や、アクセントによる語の意味の違いなどに気付くこと。
- ・言葉には、意味による語句のまとまりがあることに気付くこと。

(イ) 第3・4学年

- ・言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと。
- ・漢字と仮名を用いた表記などに関心をもつこと。
- ・表現したり理解したりするために必要な語句を増し、また、語句には性質や役割の上で類別があることを理解すること。
- ・表現したり理解したりするために必要な文字や語句について、辞書を利用して調べる習慣を付けること。

(ウ) 第5・6学年

- ・話し言葉と書き言葉との違いに気付くこと。
- ・時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くこと。
- ・語句の構成、変化などについての理解を深め、また、語句の由来などに関心をもつこと。
- ・文章の中での語句と語句との関係を理解すること。
- ・語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつこと。

学年	月	教材名(数字は扱う時間)	学習内容
1年	11月	ことばであそぼう(伝国②)	・文字を組み合わせると意味のある言葉になることに気づく。
	12月	あつまれ、ふゆのことば⑩	・冬(の言葉)を集め、それを使ってかるたの文を書く。
	1月	ものの名まえ(伝国②)	・上位語・下位語の関係に気づく。
	2月	ことばをたのしもう(伝国②)	・音節と文字の関係や、単語とそれを構成する文字の関係に気づく。
2年	4月	春がいっぱい(伝国①)	・春に関わる言葉を探し、友達と話し合う。
	6月	スイミー②(読⑧)	・様子を表す言葉を使って文を書く。
	7月	うれしいことば①	・人をうれしい気持ちにさせる言葉の働きに気づく。
		夏がきた①	・夏に関わる言葉を探し、お便りを書く。
	10月	秋の一日(伝国①)	・秋に関わる言葉に興味をもち、秋らしいものについて話し合う。
	12月	かん字の広場②	・数を表す言葉を使って算数の問題やお話を作る。
		たのしい冬(伝国①)	・冬(年末年始)の伝統文化に関わる言葉を知る。
	1月	ようすをあらわすことば(伝国④)	・様子を表す言葉について知り、言葉への興味を広げる。

3年		見たこと、かんじたこと⑤	・様子を表す言葉の使い方に注意して、詩を書く。
	2月	なかまのことばとかん字（伝国②）	・仲間の言葉や漢字を知り、文や文章の中で正しく使う。
		スーホの白い馬②（読⑩ 話・聞③）	・様子を表す言葉を使って、つながりのある文を書く。
	3月	ことばを楽しもう（伝国①）	・回文を楽しみ、言葉のおもしろさに気づく。
	4月	きつつきの商売③（読⑧） （コラム）国語辞典のつかい方	・国語辞典の使い方を理解し、必要に応じて活用する。
		漢字の音と訓（伝国②）	・漢字には音読みと訓読みがあることを理解する。
	5月	春の楽しみ（伝国①）	・春の行事に興味をもち、関わる語句を増やす。
	6月	夏の楽しみ①	・夏の行事に興味をもち、関わる語句を増やす。
	9月	秋の楽しみ（伝国①）	・「秋」に関わって、表現したり理解したりするために必要な語句を増やす。
	10月	修飾語（伝国②）	・修飾と被修飾との関係など、文の構成について初歩的な理解をもつ。
4年	12月	にた意味の言葉、反対の意味 の言葉③（伝国③）	・類義語や対義語の使い方を考えながら、自分の考えや気持ちを伝え理解するために必要な語句を増やし、また、語句が共通して有する特徴で類別があることを理解する。
		冬の楽しみ①	・表現したり理解したりするために必要な語句を増やす。
	1月	かるた②（読⑥伝国①）	・指示語（こそあど言葉）の役割を理解し、使う。
	4月	漢字の組み立て（伝国③）	・漢字辞典の使い方を知り、漢字の部首や成り立ちや画数について知識をもつ。
		夏近し（伝国①）	・春から夏へと移り変わる時期の風景に関わる語句を増やす。
	5月	いろいろな意味をもつ言葉（伝国②）	・多義語について知り、言葉への興味を広げる。
	6月	まちがえやすい漢字（伝国②）	・同音異義語や同訓異字の使い分けを通して、漢字や語句の意味の違いに気づき、文や文章の中で使う。
	7月	夏さかん①	・夏の風景に関わる語句を増やす。
	10月	秋探し①	・秋の風景に関わる語句を増やす。
		慣用語（伝国②）	・慣用語の意味を知り、生活の中で使う。
	1月	熟語の意味（伝国②）	・訓や漢字の組み合わせを手がかりにして、熟語の意味を考えるとともに、これまでに学習した漢字を正しく読んだり書いたりする。
		春立つ（伝国①）	・冬の風景に関わる語句を増やす。
	2月	「ことわざブック」を作ろう⑬（読⑩）	・ことわざや故事成語の意味を知り、使う。
	付録	物事や考えをつなぐ言葉	・「初めに」「次に」「最後に」
		知ると楽しい「故事成語」	・故事成語とは何か ・故事成語の由来
5年	4月	春から夏へ①	・語感、言葉の使い方に対する感覚について関心をもち、表現を工夫して俳句を作る。
	6月	敬語（伝国②）	・敬語の使い方に慣れる。丁寧語、尊敬語、謙譲語を理解する。
	7月	夏の日①	・語感、言葉の使い方に対する感覚について関心をもち、表現を工夫して暑中見舞いを書くことができる。
	9月	豊かな言葉の使い手になる ためには⑤（話・聞⑨）	・自分の課題について調べ、意見を記述した文章を書く。 ・語感、言葉の使い方に対する感覚について関心をもつ。
	11月	秋の空（伝国①）	・季節の移り変わりを表した言葉に興味をもつ。
	12月	同じ読み方の漢字（伝国①）	・同訓異字、同音異義語について知り、言葉や漢字への興味を深める。
	1月	（コラム）書き言葉と話し言葉	・話し言葉と書き言葉の違いに気づき、考えが伝わるよう文

6年		葉	章を書く。・共通語と方言の違いを理解する。
	2月	冬から春へ（伝国①）	・季節の移り変わりを表した言葉に興味をもつ。
		わらぐつの中の神様②（読⑤）	・比喩や反復などの表現の工夫に気づく。
	4月	春は、あたたか（伝国①）	・「春」に関する言葉を知り、語感、使い方に対する感覚について関心をもつ。
	7月	夏は、暑し（伝国①）	・「夏」に関する言葉を知り、語感、使い方に対する感覚について関心をもつ。
	11月	秋は、人恋し（伝国①）	・「秋」に関する言葉を知り、語感、使い方に対する感覚について関心をもつ。
	1月	冬は、春の隣②	・「冬」に関する言葉を知り、語感、使い方に対する感覚について関心をもつ。
		言葉は動く（読む⑤）	・時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気づく。

イ 構成に関すること

言葉の特徴やきまりに関する事項（学習指導要領から）

（ア）第1・2学年

- ・文の中における主語と述語との関係に注意すること。

（イ）第3・4学年

- ・修飾と被修飾との関係など、文の構成について初歩的な理解をもつこと。
- ・指示語や接続語が文と文との意味のつながりに果たす役割を理解し、使うこと。

（ウ）第5・6学年

- ・文や文章にはいろいろな構成があることについて理解すること。

学年	月	教材名（数字は扱う時間）	学習内容
1年	9月	みいつけた③（読⑤）	・主語と述語との関係に注意して文を書く。
2年	9月	どうぶつ園のじゅうい③（読⑨）	・簡単な構成の文章を書くことができる。
	10月	主語と述語（伝国②）	・主語・述語の存在に気づき、主語・述語の関係を理解する。
	11月	友だちのこと、知りたいな⑥（話・聞②）	・構成を考えて、友達を紹介する文章を書く。
	3月	楽しかったよ、2年生⑫	「はじめ・中・おわり」の構成で、ひとまとまりの文章を書く。
3年	5月	イルカのねむり方・ありのぎょうれつ②（読⑧）	・感想文の書き方を知り、同じ、違うを見つけて話し合う。
	6月	気になる記号⑫	・友達に報告する文章。構成に沿って段落を意識して文章を書く。
	11月	食べ物のひみつを教えます⑥	・「はじめ・中・終わり」の構成を意識し、段落に分けて書く。
		物語を書こう⑦	・民話や昔話の組み立てを理解し、それを使って文章を構成する。 ・敬体と常体との違い、句読点や改行に気を付けて文章を推敲。
	1月	かるた②（読⑤伝国②）	・段落で中心となる語や文をとらえ、引用したり、小見出しをつけて整理したりする。・指示語の役割を理解して使う。
	2月	本で調べて、ほうこくしよう⑭（読②）	・構成を考え、まとまりに分けて書くことができる。
4年	6月	読書生活について考えよう⑫（書⑫）	・調べた結果から考えたことを明確にして文章を書く。段落始めの必要な箇所は行を改めて書いたりする。
	11月	「仕事リーフレット」を作ろう⑦（書⑦）	・中心を明確にして、写真と文章を対応させながら、段落相互の関係に注意して文章を書く。
	12月	文と文をつなぐ言葉⑦（伝国⑤・書②）	・文と文の意味のつながりを考えながら、接続語を使う。
5年	5月	見立てる①（読⑥）	・文の構成を理解する。自分の考えを書いて発表する。

	6月	次への一歩 活動報告書⑩	・ 文章全体の構成を考え、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりする、表現の効果などを工夫する。
	12月	わたしたちの「図書館改造」提案④（読②）	・ 全体を見通して整理し、構成の効果などを考えて書く。
	3月	物語を作ろう⑥	・ 文章全体の構成の効果や表現の効果などを工夫する。
6年	6月	ようこそ、わたしたちの町へ⑫	・ 表現の効果を考えて文章全体の構成や、目次や見出し、リード文、解説文などを工夫する。
	9月	「平和」について考える／平和のとりでを築く⑧（話・聞⑥）	・ 自分の意見が説得力をもつように具体例や資料を集め、意見を伝えるために文章全体の構成の効果を考える。話の構成を工夫しながら、場に応じた適切な言葉遣いで意見を主張する。

ウ 表記に関すること

言葉の特徴やきまりに関する事項（学習指導要領から）

（ア）第1・2学年

- ・ 長音、拗音、促音、撥音などの表記ができ、助詞の「は」、「へ」及び「を」を文の中で正しく使うこと。
- ・ 句読点の打ち方や、かぎ（「」）の使い方を理解して文章の中で使うこと。

（イ）第3・4学年

- ・ 送り仮名に注意して書き、また、活用についての意識をもつこと。
- ・ 句読点を適切に打ち、また、段落の始め、会話の部分などの必要な箇所は行を改めて書くこと。

（ウ）第5・6学年

- ・ 送り仮名や仮名遣いに注意して正しく書くこと。

学年	月	教材名 (数字は扱う時間)	学習内容
1年	5月	はなのみち②（読⑤）	促音、半濁音「〇〇が〇〇する。」という文型の文を書く。
		なぞなぞあそび③（読②）	長音と助詞「は」「〇〇は〇〇です。」という文を書く。
	6月	くちばし②（読⑥）	拗音、助詞「を」「〇〇を〇〇する。」の文を書く。
		「は」「を」「へ」をつかおう③	助詞「は」「を」「へ」を使って文を書く。
	10月	くじらぐも③（読⑦）	かぎ「」の使い方
		しらせたいな見せたいな⑧	句読点を使ってつながりのある文を書く。
	11月	じどう車くらべ⑥（読⑥）	片仮名で、長音、拗音、促音を表記する。
	3月	いいこといっぱい一年生⑩	句読点の打ち方やかぎの使い方に注意して正しく書く。
2年	6月	お話のさくしゃになろう⑧	・ 「はじめ・なか・おわり」のあるお話を書く。(段落分け) ・ 誤字、脱字、句読点、助詞、かぎ（「」）の使い方を正す。
3年	12月	物語を書こう⑦	・ 「はじめ・なか・おわり」のあるお話を書く。(段落分け) ・ 誤字、脱字、句読点、助詞、かぎ（「」）の使い方を正す。
	2月	本で調べて、ほうこくしよう⑭（読②）	・ 楽しかったことの原因が明確になるように、「はじめ・中・おわり」の構成で、ひとまとまりの文章を書く。(段落分け)
4年	6月	読書生活について考えよう（書⑫）	・ 句読点を適切に打つ。段落始めの必要な箇所は行を改めて書いたりする。
5年	2月	複合語（伝国②）	送り仮名や仮名遣いに注意して正しく書くことができる。

エ 文字に関すること

文字に関する事項の構成（学習指導要領から）

- ・ 仮名の読み書きや使い方に関する事項
- ・ 漢字の読み書きや使い方などに関する事項

・文字文化に関する事項

学年	月	教材名 (数字は扱う時間)	学習内容
1年	4月	うたにあわせてあいうえお②(読①)	・ 平仮名で母音を含む単語を書く。
	5月	ふたりでおはなし①(話・聞②)	・ 濁音を含む単語や文を書く。終わりに「。」をつける。
	7月	ひらがなあつまれ(伝国①)	・ 平仮名を読んだり書いたりする。
	9月	かずとかんじ②(伝国②)	・ 数を表す漢字やいろいろな数え方
	10月	かたかなをみつけよう②	・ 片仮名の語を正しく読んだり書いたりする。
	11月	じどう車くらべ⑥(読⑥)	・ 句読点を使ってつながりのある文を書く。片仮名で、長音、拗音、促音を表記する。
	1月	かたかなのかたち③	・ 形の似た仮名の区別に注意して書く。
	3月	にているかん字③	・ 形の似ている漢字に注意し、漢字を読んだり書いたりする。
2年	6月	同じぶぶんをもつかん字(伝国②)	・ 同じ部分をもつものに注意して漢字を読み書きする。
	11月	かたかなの広場②	・ どんな言葉を片仮名で書くか知り、文の中で使う。
	2月	なかまのことはとかん字(伝国②)	・ 仲間の言葉や漢字を知り、文や文章の中で正しく使う。
3年	10月	ローマ字⑤(伝国⑤)	・ ローマ字を読み、ローマ字で書く。
	11月	漢字の意味②	・ 漢字には意味があることを理解し、前後の文脈から漢字の意味を考えて、漢字の意味に合う短文を作る。
4年	4月	漢字の組み立て③(伝国③)	・ 「へん」「つくり」などの構成について知識を持ち、書く。
5年	4月	漢字の成り立ち(伝国②)	・ 漢字の成り立ちについて理解する。
	10月	和語・漢語・外来語(伝国②)	・ 和語・漢語・外来語の由来を理解する。
	11月	漢字の読み方と使い方(伝国②)	・ 複数の音をもつ漢字の読み方と特別な読み方をする言葉について理解し、知識をもつ。
	2月	複合語(伝国②)	・ 語句の構成、変化、由来についての理解を深める。 ・ 送り仮名や仮名遣いに注意して正しく書くことができる。
6年	7月	漢字の形と音・意味(伝国②)	・ 漢字には、音や意味を表すものがあることを理解する。

(2) 実態調査・言語環境の整備

ア 実態調査

先に述べた2(3)の主題設定理由の児童の実態を裏付け、課題を明確にするためにアンケート調査と書く力の実態を把握するために絵を見て話をつくる調査を行った。

(ア) 書くことについてのアンケート

書くことについて児童がどう考えているかを質問紙によるアンケートにて調査(実態に応じて聞き取り)した。標準学級14名に実施した。以下の表は、アンケートの集計結果である。

問 題	選 択	どんなとき?
1 文を書くのは好きですか。	① とても好き・・・0 ② 好き・・・・・・・・・・5 ③ 好きではない・・・9	② ・ 文をきれいに書けたとき。 ・ 自由に好きなことを書くとき。 ・ 俳句を書くとき。 ・ 感想文を書くとき。 ③ ・ 作文を書くとき。(2) ・ 日記を書くとき。(2) ・ 日記を書き直しするとき。 ・ 自分で文を書くとき。でも文を写して書く

		のはとても好き。 ・ 「作文を書いて下さい。」と言われたとき。 ・ 何を書こうか考えるとき。
2 文を書くのは楽しいと思いますか。	① とてもそう思う・3 ② そう思う・・・4 ③ 思わない・・・7	① ・ 手紙を書くとき。 ・ 友達に手紙を書いたり短文作りをするとき。 ・ 国語の勉強のとき。 ② ・ 上手に書けたとき。 ・ 先生にほめられたとき。 ③ ・ わからない。 ・ どんな言葉を書いたらいいかわからない。 ・ 何を書こうかなとだけ考える。 ・ テストや作文のとき。 ・ 日記を書くとき。 ・ 苦手だから。
3 文がうまく書けたと思ったことはありますか。	① よくある・・・2 ② たまにある・10 ③ ない・・・2	① ・ 日記を書くとき。 ② ・ 手紙を書くとき。(2) ・ ほめられたとき。(2) ・ 言葉辞典を使って日記を書いたとき。 ・ 苦手だけどがんばって書いたとき。 ・ 日記で好きなことを書いたとき。 ・ くわしく書けたとき。 ③ ・ 作文を書くとき。 ・ ぼくは、「で・と・ながら・けど・が・は・に・など」の間違いが多い。
4 文をよく書きますか。	① よく書く・・・0 ② ときどき書く・7 ③ 書かない・・・6	② ・ 手紙を書くとき。(3) ・ クイズの本を見るとき。 ・ 交換ノートや手紙を書くとき。 ・ きこえる人と話すとき。 ③ ・ 苦手だから書かない。
5 文を書くのはむずかしいと感じることがありますか。	① とても難しい・4 ② 難しい・・・7 ③ 難しくない・・・3	① ・ 長い文を書くとき。 ・ 手話で分かるけど書くのがむずかしい。 ・ 今はとてもむずかしい。少しずつ分かって書ける。 ② ・ 日記を書くとき。(2) ・ 作文を書くとき。(2) ・ 短文づくり・手紙を書くとき。

		・ 文をつなぐことばを書くとき。 ・ 文を書くのは苦手だけど、うまく書けることもあるから少しむずかしい。 ・ どんなふうに、どんな順番で文を書けばよいのか分からない。 ② ・ ずっと書いてるから。
--	--	---

(イ) 書く力の実態調査

書く力の実態把握のため、絵を見て話をつくる調査図（図1）を行った。児童全員が今までに経験したことのありそうな絵を選定し、自由に書かせるようにした。個人の実態差は大きかったが、主な課題は以下の3つであった。

- ・ 語彙の少なさ。そして、それらを活用する能力が育っていない。
- ・ 表現力の乏しさ（形容詞や形容動詞、副詞を活用して、状況や様子を表していない。擬音語や擬態語を使っていない。）
- ・ 想像する力が育っていない。（見たままを書いている。登場人物の男の子に名前を付けられていない。登場人物の気持ちについて書かれていない。ストーリー性がない。）

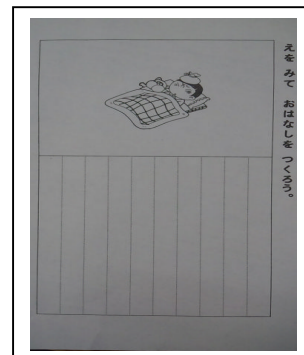


図1

(ウ) 考察

多くの児童が、文を書くことに苦手意識をもっており、好きではないと答えた児童が6割を超える。また、書くことは難しいと感じている児童が8割近くを占める。したがって、まずは児童に自信をもたせるように賞賛しながら書く活動に取り組ませたい。

また、日記や宿題以外に書く機会がないと答えている児童が多い。時々書く児童の中には手紙を書くということが挙げられている。書く必要性や楽しさを感じさせるために、学部全体で読書郵便（感想等を書いて友達に勧める）など、楽しく書く機会を設定していきたい。

児童が書くことに対して苦手意識をもたず、書く力を育てるためには、まず授業で書く活動を充実させる必要がある。ひとつひとつの授業の中で、感想・評価・説明など書かせる活動を必ず1回は取り入れるようにすることが大切であると考えられる。

また、児童数の減少により、さまざまな文章に触れる機会が少なくなっているという現状がある。そこで、作文コンクールや新聞などに掲載された作品に触れることも重要だと考えられる。このような作品の掲示や紹介を行うことによって、語彙や文章表現の拡充も図ることができるのではないかと考えられる。

イ 言語環境

児童の実態調査からも、さまざまな文章や言葉に触れ、親しむことの不足が考えられる。そのため言語環境を整える一環として今月の詩などの掲示を行い、音読や暗唱につなげていきたい。また、音読や暗唱することで、①記憶力が良くなる。②語彙が豊かになる。③言語のリズムの育成になる。④集中力がつく。⑤話す力・発表力がつく。⑥文章を書く力がつく。⑦想像力・創作力がつく。⑧情操豊かになる。⑨声が大きくなる。などの教育的効果があると考えられている。したがって、今年度は学年対応に作られている詩集を参考に、季節や言葉の面白さなどが感じられるものをまとめた。児童や学級の実態を考慮し、音読や暗唱に取り組ませたい。

月	1	2	3	4	5	6
4	あいうえお	みんなでいこう	やまびこ	そうだ村の村長さん	枕草子（春）	水のころ
5	たけのこ	あくしゅ	びょうき	竹のように	風に言葉	今日はきのうの続きだけれど
6	あめ	だれかしら	ふところ	お願いやから	あめ	素直なぎもんふ

7	トマト	木	おれはかまきり	かぼちゃのつるが	枕草子（夏）	あなたの心のなかに
9	そら	おなかへるのうた	くさり	びりのきもち	夕やけ	星とたんぼぼ
10	トンボ	さつまいも	かくれんぼ	すすき	枕草子（秋）	ある日ある時
11	ばった	空にぐーんと 手をのばせ	ぶどう	紙ふうせん	短歌2首 ・街をゆき…… ・金色の……	百人一首 ・あまのはら… ・奥山に… ・田子の浦…
12	おちば	パピプペポ	夕日がせなか をおしてくる	おかしいな	除夜の鐘	平家物語（冒頭）
1	ぼく	りすりすこり す	おとうさんの あしのうら	初雪	雨二モマケズ	冬がきた
2	きもち	はひふへほ	海とかもめ	ともだち	枕草子（冬）	自分の一歩
3	はるなつあ きふゆ	たんぼぼ	わたしと小鳥 とすすと	春のうた	ポポン	支度

（3）授業をととして

ア 1年生の教科書から課題となりそうな語句を拾い上げ、一覧にした。

月	教材名 (数字は扱う時間)	学習内容
4月	どうぞよろしく②（話・聞①） うたにあわせてあいうえお②（読①）	自分の名前などを丁寧に書く。 平仮名で母音を含む単語を書く。 あさひ うたごえ うきうき えがお
5月	ふたりでおはなし①（話・聞②） あかいとりことり（読①） はなのみち②（読⑤） なぞなぞあそび③（読②） あいうえおであそぼう②（読①伝国①）	平仮名で濁音を含む単語や文を書く。終わりに「。」をつける。 リズムを意識しながら音読。 ことり なぜ み (実) 促音、半濁音「OOがOOする。」という文型の文を書く。 みつける いっぱい はいっている ききにいく しまった ふきはじめる いっぱんみち 長音と助詞「は」「OOはOOです。」という文を書く。 うわぎ つぶつぶ なあんだ 五十音表。しりとりや言葉あつめ あやとり いすとり くわ (桑) なのはな ののはな まつむし みのむし ようかん らんらん るんるん わくわく わいわい てくてく ねむたそう
6月	くちばし②（読⑥） おさるがふねをかきました（読②） おむすびころりん（読⑤）	拗音、助詞「を」「OOをOOする。」の文を書く。 さき するどい とがった くちばし きつつき ふとい まがった おうむ かたい たね から わる ほそい ながい のびた はちどり ほそながい みつ(蜜) しゃしん ぎょうれつ しょうてんがい ならぶ 意味を考えながら音読。 けむり もこもこ はかそう えんとつ なんだか さびしい しっぽ さかだち 場面の様子などを想像しながらリズムよく読む。 むかし はたけ たがやす おなかがすく つつみ

		そのとたん ころがる ころころころりん かけだす まて おいかける すみ(隅) すっとんとん とびこむ のぞく まっくら みみをあてる おどりだす とうとう すべらせる ごちそう おれい こづち ざあざら こぼん ざっくざく くらす
	「は」「を」「へ」をつかおう③	助詞「は」「を」「へ」を使って文を書く。 きしべ ねころぶ おにごっこ となり
7月	すきなもののなあと④	「すきなもの」「その理由」をその順序で二文で書く。
	おおきなかぶ(読⑥)	場面の様子などを想像しながらリズムよく読む。 かぶ まご まく(蔭く)ぬこう(抜こう) うんとこしょ どっこいしょ けれども やっぱり まだまだ なかなか とうとう
	かけるようになった⑥	日記や手紙、語と語、文と文とのつながりに注意して書く。
	ひらがなあつまれ(伝国①)	平仮名を読んだり書いたりする。
9月	いちねんせいのうた(読②)	語のまとまりや言葉の響きを考える。 なに(何) こめる(込める) まっすぐ
	ゆうだち②(読⑥)	自分の思いや考えを発表、想像したことをもとに書く ゆうだち くさはら ずぶぬれ しぶき あいて かけこむ ちらす わかれたきり(別れたきり) あけていられな いほど たたきつけるような なりわたる ふせる(伏せる)より そう やむ(止む) とびだす てりつける きゅうに まっくら ひやりと ぼたぼたと おおいそぎ あわてて ふいと ぷりぷりして ざあざあと はげしい からりと かつと 口をきく 気をつける
	かずとかんじ②(伝国②)	数を表す漢字やいろいろな数え方
	みいつけた③(読⑤)	主語と述語との関係に注意して文を書く。 いきもの えだ みのまわり しめった どける ちかづく とびたつ
10月	かたかなをみつけよう②	片仮名の語を正しく読んだり書いたりする。 したく つめる(詰める) しょって(背負う)
	かんじのはなし③(伝国④)	漢字を使った文を、続き方に注意して書く。 はじめ えのような 「やま」のすがた ながれるようす ふるようす しめすしるし むこうから ひがのぼる はやしをぬける はやおき
	くじらぐも③(読⑦)	かぎ「」の使い方 ことです あらわれる まっしろい ちぢむ かけあし あいず ごうれいをかける はりきる つないで やっと おうえん 天まで いきなり ふきとばす

	しらせたいな見せたいな⑧	むら まち どこまでも おどろく なりだす 句読点を使ってつながりのある文を書く。 いきもの みつけたもの しらせる どんなものか なかにわ もぐもぐ すべすべ ふわふわ
11月	じどう車くらべ⑥（読⑥）	文章の中の大事な言葉や文を書き抜く。句読点を使ってつながりのある文を書く。片仮名で、長音、拗音、促音を表記する。 そのために、どんなつくりになっていますか じょうよう車 はこぶ ざせき そとのけしき うんてんせき ひろいにだい おもいにもつ クレーン車 おもいもの つりあげる じょうぶなうで 車たい かたむく しっかりしたあし
12月	日づけとよう日②（伝国②）	なじみの深い日づけを自由に書く。 こたつ はなみ わかば こみち ようじん 水まき 天の川 ハイキング ロープウエー おちば はやく こい 見つけた もらった つちあそび
	あつまれふゆのことは⑩	冬の言葉を集め、それを使ってかるたの文を書く。 うかんできますか かるた がっせん そうに ふくそう かんがえて つめたい あたたかくなる ぽっかぽか スケート すいすい うかぶ あそびにいく はがき 出そう カレンダー へやにかざる あつめた
	ずうっと、ずっと、大すきだよ④（読④）	紹介したい本のカードを書く。 せかい すばらしい 大きくなった ずっと 早く あったかい まくらにする ゆめ まい日 おいかける かだん ほりかえす わるさをする うちの すごく しかっていないながら すきなら いってやれば やらなかった いわなくっても いつしか ときがたっていき せ ぐんぐん のびる あいだに としをとって いやがるようになった しんぱいした じゅういさん つれていった としをとった まもなく 上れなく ねなくちゃいけない まくらをやって かならず ずうっと いってやった きっと わかってくれた 目をさます よるのあいだに うめた かたをだきあった かなしくてたまらなかった いくらか きもちがらくだった だって いってやっていた くれる きにしない いらない かわりに あげた いる ほかの 犬をかう いってやる

	てんとうむし（読②）	意味を考えながら音読する。 いっぴきでも ちいさくても いのち いっこ みつけたら いって そしたら いうから きみ きこえないけど
1月	ものの名まえ（伝国②）	上位語・下位語の関係に気づく。
	おみせやさんごっこをしよう④ （話・聞④）	チラシに文章を考えて書く。上位語や下位語の関係に気づく。
	かたかなのかたち③	形の似た仮名の区別に注意して書く。
	たぬきの糸車②（読⑧）	本文にない言葉を考えて絵に合うように書く。 山おく きこり ーけんや まいばん きこり おかみさん 糸をつむぐ 目玉 しょうじ 糸車 こわごわ ふりはじめる とをあける ほこり 土間 ちらり たばねる ふうに
2月	どうぶつの赤ちゃん②（読⑩）	「じぶんて〇〇できます」「じぶんでは〇〇できません」のように、 条件に合った文を書く。 生まれたばかり とじたまま よわよわしい あまりにいていない よそへいく くわえる おちち やがて えもの 1年ぐらいたつと ぴんと しま もよう そっくり たち上がる おそわれる 三十ぶんもたたないうちに たった七日 たいへん小さい おもさ まえあし はい上がる まもられる あんぜん 六か月ほどたつと
	だってだっておばあさん（読⑧）	想像を広げながら楽しく読む。 うち つりざお はんたいかわ さそう にあわない ことわる かわをむく 大いそぎ 大せいこう おたん生日ようの テーブルかけ あんまりいそいだ まし あたり おいわい のはら なかいこと くんくん すいぶん ぴょんと 九十四年ぶり とびこす むこうぎし 川下 まえかけ ぶら下がる むちゅうになる
3月	いいこといっぱい一年生⑩	事柄の順序を考え、文と文との続き方に注意して書く。句読点の打 ち方やかぎの使い方に注意して正しく書く。 （スープを）よそう かきまぜる ぶんしょう かきまぢがい よみあう

イ ワークシートの作成

- (ア) 2年生と4年生の3学期の単元から1つの単元を取り上げて、おさえた基礎・基本の語句を拾った。
語句は、「なまえことば」「うごきことば」「ようすことば」「その他」の4項目に分けた。
(2年1月単元:「ようすをあらわすことば」から)

教材名	語句			
	なまえことば	うごきことば	ようすことば	その他
ようすを あらわす ことば	ひびき (ことばの響き) 大つぶ(の雨) ふり方 たとえ	ひっくりかえす ながれおちる たとえる ながれ出る	ざんざん、はげしく いきおいよく、たっぷりと ひどく(ふる) いちどに、しとしと のんびり、とがった でこぼこ、すずしい つめたい、ほっこり ゆめのような(に) どっさり、びくびく きらきら、ほかほか ぎらぎら、ひんやり えんぴつみたいな(に) ぞうのような(に) じわじわ、もくもく こおりみみたいな(に) トマトみみたいな(に) ぶるぶる、ぐんぐん ほくほく、ふわふわ ひまわりのような(に) りっぱな、とげとげ ねずみのような(に) ぞくぞく、あたたかい ボールのような(に)	～のように ～によって ～ほどに ～みたいに ～してしまう

(4年1月単元:「初雪のふる日」から)

教材名	語彙			
	なまえことば	うごきことば	ようすことば	その他
初雪のふる日	・一本道 ・ろうせき ・山の方 ・石けり ・店番 ・停留所 ・辺り ★粉雪 ・もよう ☆世界の果て ・むれ ・一生けんめい ・はり仕事 ★おまじない ・よもぎ ・まよけ ・すき間 ★つむじ風 ・草屋根 ・もみの森 ・谷間 ・むれ ・さざんか ・いぶき ・足取り ・ひと息 ・年より	・しゃがんでいる ・うつむく ★首をかしげる ・息をつく ・つぶやく ・立ち上がる ★目を真ん丸にする ・飛びこんでみる ★はずんできた ・進んでゆく ・あらい息をしながら ・得意そうに ・歯をむき出す ・続いていた ・かわいた ・あせをかく ・暗くなる ・ふぶきになる ★ふりしきる ・目をばちばちさせる ・とんでゆく ・どきっとする ・まきこまれる ・帰ってこられなくなる ・見開く ★つかえる ・はずみだす ★手を休める ・さらわれる ☆唱える ・息をつく ・言いかける ・ふさぐ ★つりこまれてしまう ★かじかむ ・青ざめる ・思わず ・拾い上げる ・よろける ・とぎれる ・かぐ・まう ・まう ・歩いてこられる	・ほうっと ・ぴょんと ・得意そうに ・ほろほろと ・びっしょり ★どんよりと ・ほっほっと ・とんとんとん ・後から後から ・どっと ・ちょっと ★どっさり ★ひっそりと ・小走りに ・あざやかな ・ふつくりと ・そっと ・じっと ・ふっと ・だんだん ★ほんのり ・むちゅうで ★ほろほろと ・口々に	・なあって ・～みたいに ・たった ・おや ・それでも ・まだまだ ・こんなに ・そればかり ・～まで ・だんだん ・こんな ・～にも ・よくよく ・もう ・すると ・やっぱり ・ちっとも ・～のような気がする ・～ことといたら ・～くらいで ・～にしか ・なんと ・たった～だけ ・～ところなのでした。 ・～のとおり ・それなら ・どんどん ・どうしても ・こうして ・このときです。 ・心の中で ・～かしら ・いくつも ・～のようで ・～そうになる ・～うちに

イ 拾い上げた語句の中から、さらに重要な語句（とくにおさえたい語句）を10個前後に絞った。各語句のワークシート（授業の最初5分間程度でできるもの）を作成した。

二年 ようすをあらわすことば 名前 ()

一、正しい いみに、○をつけましょう。

ゝのように (ゝみたいに)

() あることをにているほかのものにたとえていう言い方

() あることをはんたいのいみのものにたとえていう言い方

() あることを自分のかんがえにかえていう言い方

二、() の中に当てはまる ことばをえらんで 書きましょう。

家 () 学校まで、歩いて一時間かかった。

ぼくは、さむがりです。() 、洋服をたくさん着ます。

さむい日は、手が こおり () つめたくなる。

だから から のように

三、「ゝのように」や「ゝみたいに」をつかって、みじかい文を作りましょう

初雪のふる日 () 年 氏名 ()

1 次の文の□(四角)の中に適当な言葉を入れましょう。

「かた足、両足、とんとんとんー。」

よくよく見ると、その後にも白うさぎ、そのまた後にも白うさぎー。

雪の中を、もう後から後から、白いうさぎが続いてくるのでした。

2 「ふりしきる」の意味として正しいのはどれでしょうか。正しいものに○(丸)をつけましょう。

() 雨がしとしと静かにふる

() 雨や雪が休みなく盛んにふる

() 粉雪など細かい雪がふる

3 次の中で「ふりしきる」の使い方として正しいものを選んで丸をつけましょう。

() 雨がふりしきって空には虹が出た。

() 雪が降りしきる中でも救出活動は続行された。

() 春の日差しがふりしきって今日は、ピクニック日和だ。

6 研究の成果と今後の課題（次年度へ向けて）

（1）仮説1 「書くこと」の基礎・基本を明確にし、系統性を重視した指導を行ったら、子どもたちの「書く力」を高めることができるのではないか。

ア 成果

- ・ 国語の教科書を基にして、1～6年の系統性を調べてまとめたことで内容が分かりやすくなった。
- ・ 「語句」「構成」など、それぞれに関することを、一覧表にすることで、系統性が分かった。
- ・ 教師が書くこと（子どもたちが書けること）の重要性を将来も含めて（を見据えて）再確認できた。
- ・ 国語科に着目し、「書くこと」の基礎基本を整理できたのはよかった。

イ 課題

- ・ 「書くこと」や「語句」などと言でくくっても範囲が広すぎるので、目的や方法を共通理解して取り組めたらよい。
- ・ 具体的な語句を確認することで、意識して使えるようにしたい。

（2）仮説2 言語環境を整理し、語彙を増やすための工夫をすれば、「書く力」を高めることができるのではないか。

ア 成果

- ・ 「書くこと」を意識した実践を行うことで、子どもが言葉をしっかり覚えているかを確認することができた。
- ・ 語彙力向上に向けた取り組みについていろいろ知ることができた。
- ・ 実態調査で子どもの課題を知ることができた。
- ・ 語句を拾い、ワークシートを作ることで、学年で覚えたい（身につけさせたい）ワードを共通理解することができた。
- ・ 重要語句を拾ってみることで、「次はこんな言葉が出てくるのか。」と事前に把握でき、授業前後でも意識して子どもに問いかけ（語句の意味の確認等）ができた。

イ 課題

- ・ 「書くこと」への意識を高めて、授業に取り組んでいく中で、漢字を書けていても読めない、ワークシートの問題はできて、同じことを質問したとき、答えられないなどの課題が見つかった。
- ・ 書く力をつけるために、読むことも大事にできるようにしたい。

（3）次年度へ向けて

- ・ 子どもたちのつまずきを参考にしながら、「口声模倣、語彙力をのばす、書く力、基礎学力の定着」といったキーワードについてさらに考え、仮説の具体化を図り、共通理解・実践を行う。
- ・ 実際の授業においてどのように生かし評価していくのか、授業研究を通してお互いに学び合う。
- ・ 系統の中で、特に課題となりそうな語句をまとめ、意識して使えるようにする。
- ・ 語彙を増やし、書く力に繋げるため、詩の暗唱に取り組む。

【中学部研究】

1 研究主題

「 学力の向上を目指した取組 」
～ 国語力を育てるための取組 ～

2 主題設定の理由

聴覚に障害のある本学部の生徒は、特に文字言語情報よりも音声言語情報が少ないことが特徴としてあげられる。

本学部の生徒の実態として、標準学級では、習得している語彙数が少ないことで、文章の読解が難しいこと、接続詞や助詞の使い方を身につけていないことで、正しいことばや文章で相手に伝えることができないなどの課題が見られる。また、重複障害学級では、日常生活の中で経験不足のことが多いことで、学習の定着に時間がかかり、繰り返し学習が必要なこと、問題文の意味が理解できずに適切な解答ができないといった課題などが見られる。

今後は入試が控えていたり、将来的にも基本的な知識や適切なコミュニケーション能力を身につけておいたりすることが必要だと考えられる。そこで、「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」といった国語力を育てることで、「聞く力」「話す力」「読む力」「書く力」の向上を図ることができ、さらに、そのことが学力の向上につながっていくと考えられる。

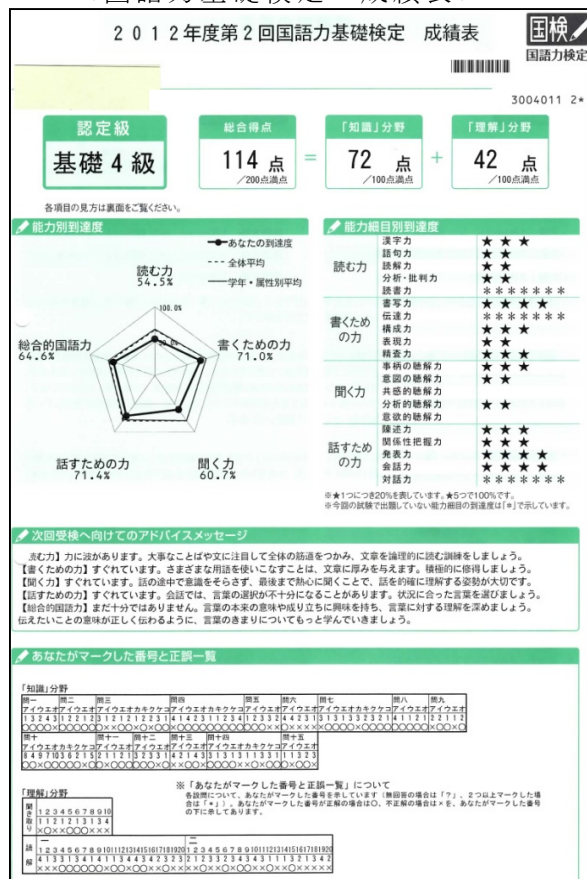
そこで、本学部では、国語力を育てることが、豊かな教養や価値観、感性等の習得につながると考え、国語力を育てるための取組について研究を行うこととした。

3 研究の内容・方法

- (1) 国語力の実態把握
- (2) 国語力を育てるための実践事項の検討、実践
- (3) 実践事項の見直し

4 研究経過

月	研修の内容
4～5	・今年度の学部研修についての確認
6	・国語力実態把握の方法の検討、決定
7	・実践事項の検討 ・授業実践
8	・各教科の実践事項の共通理解
9～10	・授業実践
11	・国語力基礎検定受検
12	・国語力基礎検定の結果をもとにした個々の目標設定



- ・ 国語力基礎検定の成績表をもとに、特に不足している力や身につけさせたい力を学部で検討し、個々の目標設定を行った。それを本人、保護者、寄宿舎へも提示し、家庭、寄宿舎での取組について検討してもらい、それぞれの取組方法について意見を出してもらった。また、各教科や学級において、国語力に関しての取組を行うようにし、目標や実践事項については個別の指導計画へ記入することで明確に示せるようにした。

	A 児	B 児	C 児	D 児
長期目標	・ 語句力（単語や句の意味がわかる力）の向上を図る。	・ 語句力（単語や句の意味がわかる力）の向上を図る。	・ 発表力（公式な場で複数の人を相手に適切に話すことができる力）の向上を図る。	・ 意欲的聴解力（最後まで聞くことができる力）の向上を図る。
短期目標	・ 語彙数を増やすことができる。	・ 確実な視写ができる。 ・ 短文を記憶して書くことができる。	・ 相手に伝わるように、ゆっくりはっきりと発表することができる。	・ よりよい傾聴態度を身につけることができる。

学級	・毎日の日記は慣用句を用いて書くようにする。 ・帰りの会では，1 分間スピーチを行うようにする。 ・家庭，寄宿舍での取組を設定する。			
家庭・寄宿舍	・本を読み，保護者から，内容についての質問をし，答えるようにする。	・保護者と一緒に，新聞，教科書を音読するようにする。	・寄宿舍での一日の反省を 1 分間発表するようにする。	・寄宿舍での友だちの反省発表を聞き，質問を 1 つするようにする。
国語	・ノートを取る際に罫線やマスを意識させたり，一画一画に注意させたりしてバランスの良い字体に気づかせる。	・ノートを取る際に罫線を意識させたり，一画一画に注意させたりしてバランスの良い字体にするようにする。 ・知らない語句や漢字については自分で調べたり，教わったりして理解語彙を増やしていくようにする。	・助詞や 5 W 1 H を意識させることで正しい文を書くことにつなげ，理由を考えさせることで思考が深まるようにする。 ・知らない語句や漢字については自分で調べたり，教わったりして理解語彙を増やしていくとともに，小学生程度のドリル学習を通して基礎基本の力を付けさせる。	・聞く態度を意識させ，指示や発問に対して確実に理解できているかノートや発言を通して確認しながら授業に取り組ませる。 ・書く目的を意識させ，ノートを取る際の声掛けやチェックを通して訂正させ丁寧に書くようにさせる。
数学	・何を問われているのかをつかむために，用語の意味や目的語（助詞）に留意してわかるまで読み返させる。 ・事象の中にある数量を文字式や方程式に表す学習では，文章を読んで数量関係を図に表し，言葉の式を立てた後文字式に変換する練習を繰り返す。	・用語の読み書きを，口話と指文字と筆記で確認する。 ・身のまわりの事象の中にある課題を解決する学習（文章問題）では，図形の名称や面積の求め方等を確認しながら数量の関係を図と言葉の式で表し，式を立てさせる。	・用語の読み書きを，口話と指文字と筆記で確認する。 ・身のまわりの事象の中にある課題を解決する学習（文章問題）では，数量関係を考える際に，「ちがい」「～ずつ」「分ける」などのよく使われる言い方を図示させながら問題に取り組ませる。	・平面図形と空間図形の学習では，図形の名称や部位の名称等の読み書き方を徹底させる。 ・事象の中にある数量を文字式や方程式に表す学習では，文章を読んで数量関係を図に表し，言葉の式を立てた後文字式に変換するようにさせる。
社会	・文章を読ませるとともに，写真やイラストといった視覚的教材を利用して，文の内容を	・教科書や板書の内容で分からない言葉はないか，適宜確認することを意識させ，進める	・それぞれの地域の特色を資料を読み取って，みんなの前で発表することができるよう	・身近なものやニュースなどに関連付け，話をする。 ・それぞれの地域の特

	より理解できるようにする。 ・教科書や板書の内容で分からない言葉はないか，適宜確認しながら授業を進めるようにする。	ようにする。 ・ノートの字が雑な時はもう一度丁寧に書き直させる。	にする。	色を理解する中で写真や実物を通して興味をもって取り組ませる。
理科	・実験や観察の内容をノートに文章にし，まとめさせる。 ・表現の方法をいくつか考えて言葉や文章にし，記憶させる。	・実験や観察の内容をノートに文章にし，まとめさせる。 ・表現の方法をいくつか考えて言葉や文章にし，記憶させる。	・実験や観察の内容をノートに文章にし，まとめさせる。 ・表現の方法をいくつか考えて言葉や文章にし，記憶させる。	・実験や観察の内容をノートに文章にし，まとめさせる。 ・表現の方法をいくつか考えて言葉や文章にし，記憶させる。
音楽	・DVD を鑑賞したり，実際に箏を演奏したりして日本の伝統音楽に親しませる。 ・曲想を感じ取って，速度や強弱の変化を生かした表現を工夫させる。	・DVD を鑑賞したり，実際に箏を演奏したりして日本の伝統音楽に親しませる。 ・曲想を感じ取って，速度や強弱の変化を生かした表現を工夫させる。	・曲想を感じ取って，速度や強弱の変化を生かした表現を工夫させる。	・DVD を鑑賞したり，実際に箏を演奏したりして日本の伝統音楽に親しませる。 ・アジア各地の音楽に触れ，音楽や音色の特徴を感じ取らせる。
保健	・板書や紙面において視覚的に用語の確認を行うようにする。 ・あいまいな言葉や新しい用語はその都度確認するようにする。	・板書や紙面において視覚的に用語の確認を行うようにする。 ・書く作業や声に出して言う活動を多く取り入れるようにする。	・あいさつや発表時には，「ゆっくりはっきり」を徹底するようにする。	・人の話を聞く時の態度（姿勢，視線）を徹底するようにする。
技術・家庭	・基本的な語句や言葉の意味について，日常生活の中で確認したり，小テストをして定着度の確認をしたりする。 ・漢字の読みや意味を辞書を使って調べる時間を多く設ける。	・基本的な語句や言葉の意味について，日常生活の中で確認したり，小テストをして定着度の確認をしたりする。 ・作り方や手順等を書く時間を多く設ける。	・基本的な語句や言葉の意味について，日常生活の中で確認したり，小テストをして定着度の確認をしたりする。 ・日常生活に関する事柄について，自分の考えをまとめて発表する時間を多く設ける。	・基本的な語句や言葉の意味について，日常生活の中で確認したり，小テストをして定着度の確認をしたりする。 ・友達の意見を聞く機会を多く設け，内容を理解できているか確認する。

6 研究の成果と今後の課題

今年度は、国語力の実態把握と国語力向上のための各教科の取組の検討を主に行った。これまでも、中学部では、国語力向上に向けての取組は各教科や担任で行ってきっていたが、それぞれが様々な方面から支援を行ってきっていたことや結果が目に見えて分からなかったことなどから、その成果も実感できずにいた。しかし、今回、国語力の実態把握の方法を検討し、国語力基礎検定を受検したことで、国語力の中の「読む力」「書くための力」「聞く力」「話すための力」「総合的国語力」の5つの力の実態把握ができ、それぞれの能力をさらに細かくわけた能力細目の到達度の把握も行うことができた。そして、その結果をもとに、各教科担、担任、寄宿舍、保護者と連携しながら同じ目標に向けて取り組むことができた。これまで、保護者との連携の中では、職員、保護者間で実態の捉え方に大きな開きがあったため、指導方針の共通理解を図ることに時間を要していたが、今回、検定を受け、国語力について細かく実態を把握できたことで、学校と家庭で共通の取組を設定することにもつながった。また、実態の伝え方や伝える場の設定の仕方などの課題も見えてきた。

来年度は、再来年度に予定している2回目の国語力基礎検定受検にむけて、各教科担、担任、寄宿舍、保護者と連携を深めながら取組を実践していきたい。また、それぞれの取組が実際に国語力の向上につながっているのか、具体的な評価方法の検討も行っていきたい。

高等部の研究

「専門高校等との交流授業やデュアルシステムを活用した教育課程の編成」

1 研究内容等

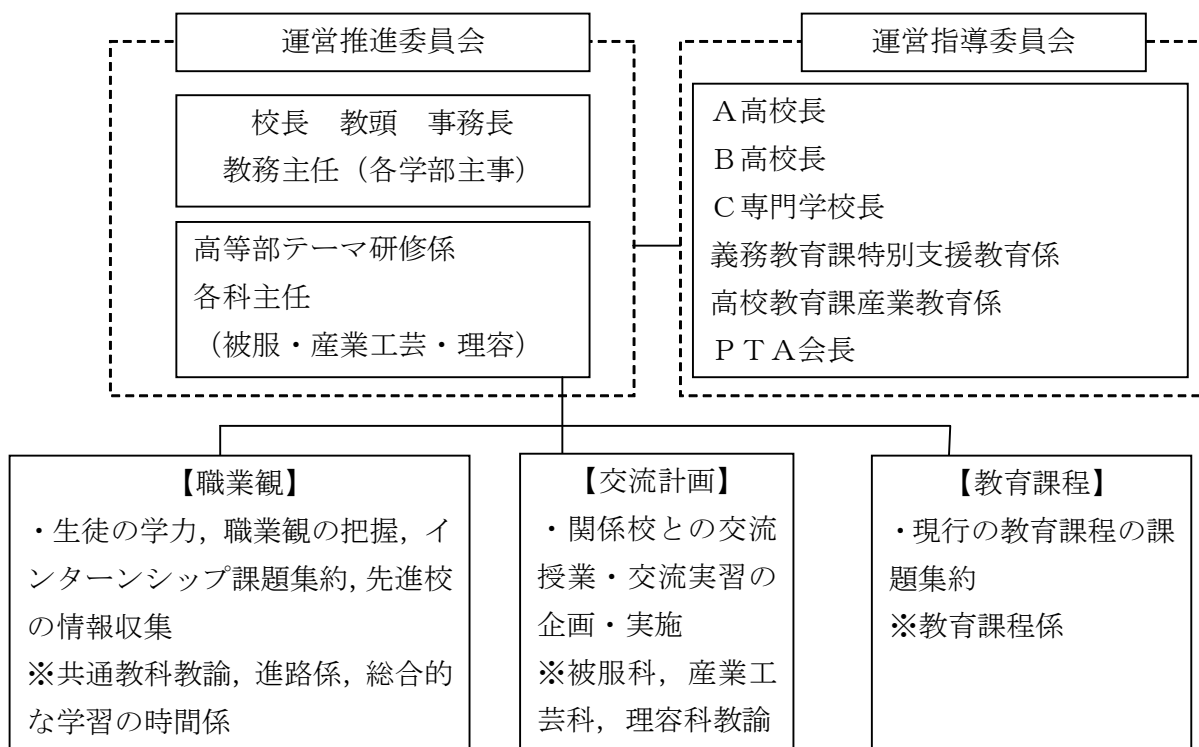
(1) 本校の課題

本校は、職業学科の特性を活かした人材育成を目指し、生徒の実態に基づいた教育課程を編成し、教育活動に取り組んでいる。しかし、生徒数減少に伴う集団での学習機会の減少やインターンシップなど就労体験の不足もあり、十分な成果につながっていない。そこで、専門高校や関係機関との交流授業とデュアルシステムを導入することにより、働くことの意義を理解し意欲的に就業する生徒の育成が見込まれるのではないかと考えた。(研究仮説)

今年度の研究内容として、職業観に関する調査や学力調査により生徒の実態把握や分析を行う。集団での学習機会の減少に対応するために、近隣の専門学科を置く高校や関係機関との交流授業や実習、さまざまなコンテストに参加するための計画を立て、実施する。また、就労体験学習の一環として行っているインターンシップの課題を集約・分析し、就労体験の不足の原因を探る。

さらに、先進校の視察や外部講師招へいによりインターンシップやデュアルシステムの情報収集を行う。

(2) 研究組織



(3) 研究計画

月	研究内容	実態把握	交流授業	インターンシップ	デュアルシステム	教育課程
4	高等部の研究の経緯説明					
5	調査研究		被服科交流授業			
6		CRT (国語, 数学) の実施	理容科交流授業	インターンシップのアンケート実施	先進校の情報収集	本校の授業の全体像の把握
7		チェックリストの検討		アンケート集約		
8		チェックリストの実施		アンケートの分析		インターンシップ
9	2 学期, 3 学期交流授業・実習の企画等	CRT (国語, 数学), チェックリストの分析 方向性の提示			質問事項作成	職場見学 交流授業 校外実習
10	H25年度教育課程案編成		被服科交流授業		質問事項検討	コンクール
11	H25年度教育課程案検討 外部講師招聘		産業工芸科交流授業			コンテスト 位置づけ確認
12	12月: 高等部研修 12月: 全体研修	先進校視察 25年度教育課程案再検討	理容科交流授業 産業工芸科交流授業	先進校視察 25年度教育課程案再検討		考察とまとめ
1	H25年度教育課程案検討	程案再検討 年間指導計画		年間指導計画検討後, 具体的な流れを再確認		
2	年間指導計画作成 外部講師招聘 1月: 全体研修	検討後, 具体的な流れを再確認	被服科交流授業 産業工芸科交流授業 理容科交流授業			
3	運営指導委員会 (3月)					

(4) 研究経過及び課題

本校高等部の課題として, 集団での学習機会の減少, 就労体験の不足, 職業観の育成の不十分さが挙げられている。

まず, 就労体験の不足, 職業観の育成の不十分さについて生徒の状況を把握するために, 独立行政法人高齢・障害者雇用促進支援機構の職業観を確認するチェックリストと学力調査であるCRTを行った。

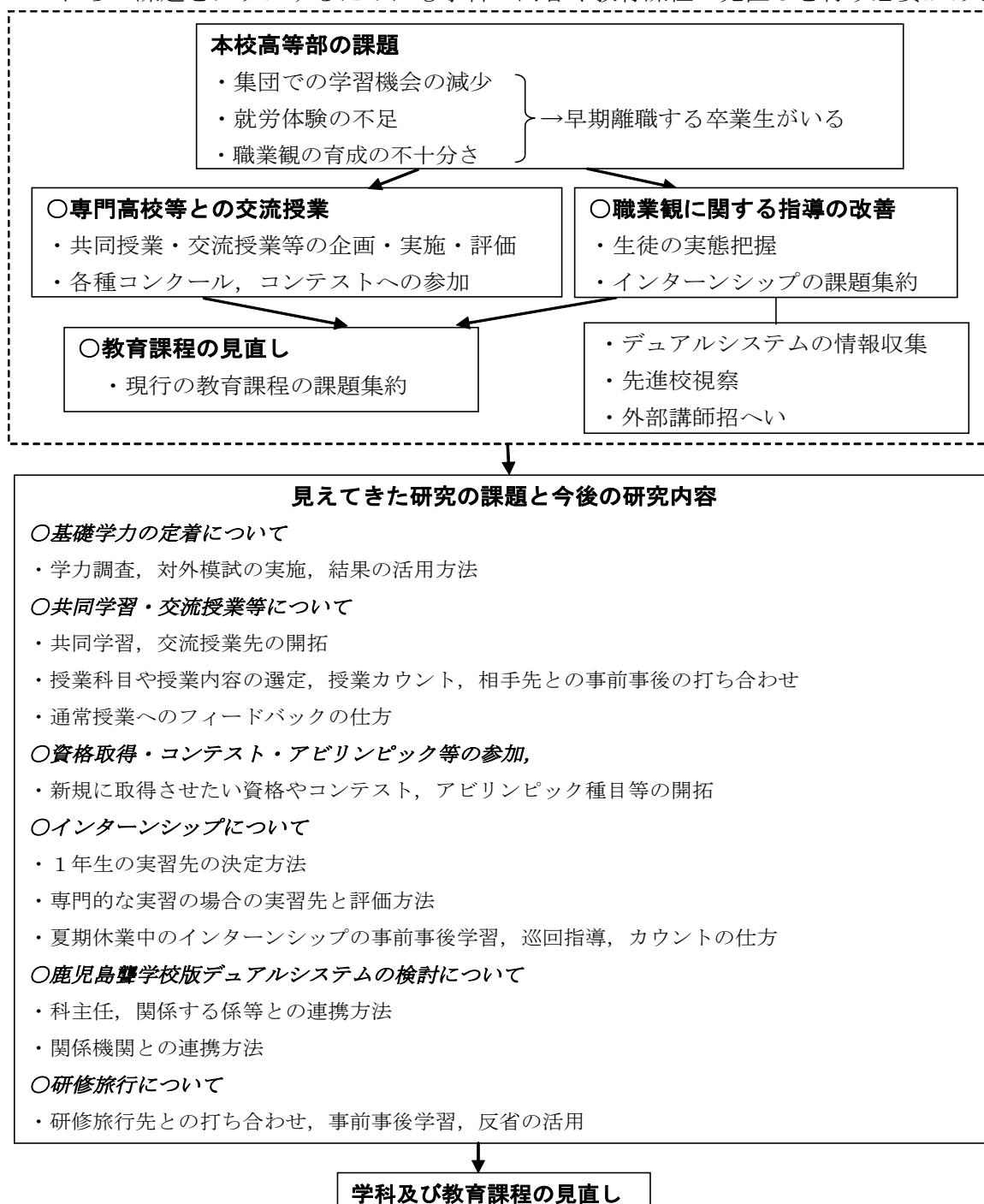
次に, 集団での学習機会の減少に対応するために, 近隣の高等学校 (A高校, B高校) やC専門学校との交流を学期1～2回程度計画・実施した。また, 高校生ものづくりコンテスト県大会, 県工業クラブ連盟生徒発表アイデアコンペ, 県理容技術大会や全国理美容学生技術大会九州地区予選などのコンテストや技術大会などにも参加した。

さらに, 現在実施しているインターンシップの反省と課題を集約したり, インターネットや先進校視察, 外部講師招へいにより, いろいろな学校で行われているデュアルシステムの情報収集を行ったりすることで, 現行の教育課程の課題を洗い出すこととした。

研究する中で課題として見えてきたものは, ①CRTの結果で明らかになった基礎学力定着方法の検討, ②総合的な学習の時間で行っている就労体験的な内容だけでなく, 専門の授業内容を生かせる実習まで幅を広げたインターンシップの機会を増やす, ③交流目的

の交流授業と教科の目的を達成するための共同授業と整理し、共同授業、交流授業の回数や内容の検討、交流授業を充実させるために事前の細かな打合わせが必要、④新規に取得させたい資格やコンテスト等の開拓、⑤県外の最先端の技術や職場を見学、体験するための機会として修学旅行を研修旅行という位置付けにする、⑥インターンシップ、資格等の取得、共同・交流授業、研修旅行などにより一貫して職業観を育成する教育課程編成を目指すこと、併せてインターンシップや学校外の施設やそこで行う実習等を計画的に取り入れた「鹿児島聾学校版デュアルシステム」の整理と今後の詳細なシステムの構築が必要である。

これらの課題をクリアするためにも学科の内容や教育課程の見直しを行う必要がある。



【資料】

本校高等部生徒の実態について

1 チェックリストでの職業観の調査を行った。その結果が以下のとおりである。

チェック項目	学部の傾向
I 日常生活 生活のリズム，健康状態 身だしなみ，出席(出勤)状況 交通機関の利用，規則の遵守 危険への対処，金銭管理	体調管理はできており，生活のリズムも規則正しい生徒が多い。身だしなみはきちんとしているが，注意を受ける生徒もいる。金銭管理や公共の交通機関は経験している範囲に限られることが多い。
II 対人関係 挨拶・返事，会話，意思表示 電話等の利用，情緒の安定性 協調性	相手に応じた挨拶ができる生徒もいる。会話で口話・手話・筆談を使って自分の意思表示はでき協調性はあるが，積極性に乏しい面もある。
III 作業力 体力，指示内容の遵守，正確性 機器道具の使用，器用さ 作業速度，作業変化へ対応	半日程度の作業をする体力があり，指示通りに作業ができるが，必要な作業速度は6～8割程度である。作業内容，手順の変化に対応はだいたいできる。
IV 作業への態度 就労意欲，質問報告連絡 時間の遵守，積極性，集中力 責任感，整理整頓	働く意欲はあり，質問・報告・連絡もできる。作業には積極的に取り組み，与えられた作業や当番は最後までやり遂げようとする。
V その他 性格，職種の理解，資格 資格取得	自分の性格を口話で説明できるが，文章で正しく表現できないこともある。なりたい仕事についてだいたい知っており，必要な資格，取得方法を知っている生徒もいる。

2 生徒の実態把握として，6月にC R T調査新中3国語，数学を実施した。

- (1) 国語で全国平均と比較して著しく低いのが，「文の照応に注意して書くこと」「課題を見つけて整理して書くこと」「単語の活用や用法を知ること」の3領域である。この領域の学力不足を補うには，主述の正しい対応のさせ方，読解，語彙の拡充などを重点的に学習する必要がある。
- (2) 数学でどの領域においても全体的に定着が不十分である。特に「関数」や「資料の活用」において著しい。いずれも，資料や図を読み取って，関係性を理解する部分が難しい。単純な計算はできるが，文章問題など応用になると内容を理解・イメージできていない。

交流授業・交流実習の状況について

被服科では、平成22年度まで、A高校のJRC部と交流を実施し、文化祭に向けての手話歌の練習や本校の文化祭を通しての交流を行っていた。平成23年度は、A高校の生活科学科3年生とレクリエーションや聾学校での実習体験を通じた交流を行っていた。今年度に入り、A高校へ交流授業を提案し、同校の服飾手芸の授業で交流授業を実施した。

産業工芸科では、近年、高校生ものづくりコンテスト（旋盤部門、家具工芸部門）や、生徒発表大会アイデアコンペ（クラフト部門）、計算技術競技大会等に参加している。その中で、B高校（工業）の生徒の各種大会における取組状況等を踏まえ、同校との専門教科における技術交流や、職員の専門性向上を図る目的で、平成23年度から交流授業を実施することになった。

理容科では、一般の高校で理容についての技術指導をしているところがない為、C専門学校と交流している。また、幅広いニーズを考え、エステティックやネイルなどの技術の習得、向上を目指し、他の美容系の専門学校との交流授業を模索している。この他にも、特別養護老人ホームでの理容校外実習を通じて、理容を行なう上でのマナーなどの向上を図るとともに、施設の方々とのふれあいを通して、社会奉仕活動等へ目を向けさせる機会とするなど、豊かな人間性を育てるなどの目標を掲げている。

科名	被服科	産業工芸科	理容科
実施時期	平成24年度4回実施 5月21日（月） 10月16日（火） 10月19日（金） 2月1日（金）	平成23年度2回実施 （2学期1回，3学期1回） 平成24年度3回実施 11月7日（水）電子機械系 12月12日（水）建築系 2月6日（水）インテリア系	平成20年度より交流開始 （1学期に1回実施） 平成24年度1回実施 5月31日（木）実施
交流学校名	A高等学校 生活科学科	B高等学校 Ⅰ類電子機械系 Ⅱ類インテリア系， 建築系 電子機械系	C専門学校 理容科 美容科
内容	・服飾手芸（ファブリックステンシル作品の製作） ・シャツ型ティッシュケースづくり ・授業見学 ・ファッションショーの鑑賞 ・文化祭の鑑賞	・CAD実習 ・旋盤実習 ・溶接実習 インテリア系 ・木材加工実習 ・造形実習 建築系 ・CAD実習 ・木材加工実習	ワインディング（6月にある県理容技術大会に向けて専門学校生徒との合同練習）

インターンシップについて

1 本校高等部のインターンシップ(就労体験)

(1) 主なねらい

- ・ 日々の学習と職業との関係についての理解と学習意欲の促進を図る。
- ・ 主体的な職業選択や職業意識の育成を図る。
- ・ 異世代とのコミュニケーション能力の向上を図る。

(2) 主な内容

- ・ 時期及び期間 : 6月中旬(5日間)
- ・ 対象生徒 : 高等部2・3年生, 高等部専攻科生
- ・ 受入先 : 通勤可能または寮完備の県内事業所(企業, 福祉施設等)
- ・ 教育課程上の位置付け: 総合的な学習の時間

2 24年度のインターンシップ受入先(10か所)

主な職種	主な仕事内容
自動車整備・販売(2か所)	洗車, 板金整備補助等
飲食店	清掃, 皿洗い, 野菜の仕分け作業等
保育園(2か所)	保育補助(乳幼児と遊ぶ, 着替え・排泄の手伝い, 環境整備等)
市役所	資料の印刷・製本, 文書発送等
ホテル	客室清掃
理容店(3か所)	店内外の清掃, 洗濯等

3 インターンシップの課題集約に当たって

高等部のインターンシップは、県内の企業や福祉施設、ハローワークなどの関係機関等と連携を図りながら計画・実施し、成果を上げてきたが、働くことへの目的意識や将来についての夢や願いが十分に育ちきれず、卒業後、早期離職する者が少なからずいるという現状もある。そこで、従来の取組を見直すため、受入先からの評価表を基に、生徒の課題を集約すること、また本校職員に対して改善のためのアンケート調査を行うこととした。

4 研究内容

(1) 受入事業所からの評価表を基にした生徒の課題集約

ア 評価表(受入事業所用)のまとめ

インターンシップ期間中、働く技能や態度について、受入事業所から評価をいただき、事後指導につなげている。24年度の評価表については、次のように整理した。

評価項目	評価が高い傾向にあった項目	評価が低い傾向にあった項目
作業態度	・ 作業の服装はきちんとしている ・ むだ話をしない	・ 動作を機敏にする ・ 自分から進んで仕事をする ・ 要領よく仕事をする
対人関係	・ 欠勤・遅刻・早退などはすぐ連絡する ・ 「はい」「いいえ」をはっきり言う ・ 気持よくはっきりあいさつをする	・ 分からないことは尋ねたり聞き返したりする ・ 言葉遣いを丁寧にする ・ 休み時間などは一緒に働く人たちの仲間に入ることができる
能率		・ A評価(良い)の割合が低い

インターンシップの総評で、本校生徒への要望として以下のような意見が挙がった。

- 作業内容の理解を深める確認や指導をしたがなかなか改善がみられなかった。
- 仕事に対してもっと興味をもち、職業に関するいろいろな知識を身に付けてほしい。
- 技術面では、コツコツ努力すれば向上していくと思うが、自分から仕事を見つけること、積極性や周囲への気遣い、目配りができるようになってほしい。

○まじめで素直な態度で好感が持てるが、意思の疎通が難しい。もう少し笑顔がほしい。

イ 受入事業所からの評価による本校生徒の課題

課題1 聾学校という限られた環境での活動経験から、社会生活経験が不足し、社会的な一般常識や働く上での基本的な知識の理解が不十分なのではないか。

課題2 慣れている環境では、周囲の人と積極的にかかわったり、意欲的に活動したりするが、慣れていない環境では、物怖じしたり、消極的になったりして、自分から進んで仕事に取り組むことができないのではないか。

(2) 職員アンケートによるインターンシップの課題集約

ア アンケートの実施

24年6月、今後のインターンシップの実施についての方向性を検討するために高等部全職員を対象としたインターンシップに関するアンケートを行った。

結果は、次の表のとおりである。

表 アンケートの結果と今後の具体策

アンケートの主な項目	アンケートに出た主な意見	今後の具体策	備考
教育課程上の位置付け	・現行通り (総合的な学習の時間) ・各科の実習	・従来通り、総合的な学習の時間で行うインターンシップ、新規取り組みとして、各科の専門の授業内容を生かせる実習の2本立ての取り組み	・各科の専門を生かせる実習の教育課程上の位置付け
実施学年	・全学年で実施 ・現行通り (2・3年での実施)	・全学年で実施 (中学部で3日間の就労体験を行っていることを考慮し、高等部では1年生から行う)	・生徒の実態に応じた対応
実施回数	・現行通り年1回 ・生徒に応じて ・年2回	・年2回 (総合的な学習の時間と各科の専門の授業内容を生かせる実習)	
実施時期	・現行通り(6月)	・6月(総合的な学習の時間) ・夏期休業中(各科の専門の授業内容を生かせる実習)	
実施期間	・1週間(5日間) ・2週間(10日間)	・5日間(総合的な学習の時間) ・5日間～10日間(各科の専門の授業内容を生かせる実習)	

イ アンケート結果の考察

インターンシップは、従来どおり総合的な学習の時間で取り組むことが妥当と考えられるが、勤労観・職業観の育成を図るという視点から、より実践的な職業訓練の場も求められている。特に、即戦力となる職業人の育成という面では、各学科の取組を充実させることが急務であると考えられる。

また、生徒全員に対し、早い段階から多くの就労体験、長期間の職業訓練が必要であるという意見が大半を占めていることから、学部全体でキャリア教育を進めるという視点に立った教育課程編成が求められる。特に、学校での教育と企業における職業訓練を関連させたデュアルシステムの導入は、高等部の課題改善に密接に関わるものと考えられることから、県内外の先進的な取組を参考にしながら、「鹿児島聾学校版デュアルシステム」の構築を急がなければならない。

日本版デュアルシステムの情報収集について

本校にデュアルシステムを取り入れるかどうか、または、取り入れた場合、どのような形で取り組むかということを考察するため、今年度の研修では先進校視察に赴き、情報の収集を行った。

1 視察先高校と実施日

- | | |
|------------|-------------|
| ① D高校（東京都） | 平成24年12月 7日 |
| ② E高校（福岡県） | 平成24年12月10日 |
| ③ F高校（三重県） | 平成25年 2月12日 |
| ④ G高校（大阪府） | 平成25年 2月13日 |

2 視察先の内容の比較

視察先	D高校	E高校	F高校	G高校
設置学科	・デュアルシステム科 他4科	・機械科 ・電気科 ・情報技術科 ・建築科	・機械系 ・電気系 (さらにコースによりわかれる)	・普通科 ・デュアルシステム 総合学科(25年度～)
デュアルシステム導入の経緯	第20回東京都産業教育審議会の答申の内容から、東京都教育庁・産業労働局が提携。働くことを学びとする「東京都版デュアルシステム」が提唱され、都の指定を受けデュアルシステム科が設置された。	同地区の、他の工業高校との中で、生き残りをかけた対策が絶対必要であるという考えから、魅力ある学校づくりとしてデュアルシステムを取り入れた。	生徒の勤労観、職業観を養うことを目的とし平成16年度から文科省の『専門学校等における「日本版デュアルシステム」推進事業』の指定を受け、導入した。	「指導困難校」「課題集中校」とよばれるような学校の状況の中で、生徒の学力向上、「人間力」向上を目標に、文科省の「専門学校等における日本版デュアルシステム」の研究校に手を上げた。
教育課程上の位置づけ	・学校設定科目「働くこと学ぶこと」を設定 長期就業実習、工業技術実践基礎、工業技術実践応用、工業技術実践発展でカウントしている。	・教育課程上の取組ではないが、長期休業中に実施している。 評価は出さないが、会社からの評価はいただいている。	・学校設定科目「企業実習」を設定 1年間を通して、7単位の ・1単位は、学校でレポート作成・準備等に充てている。	・学校設定科目 デュアル実習Ⅰ、デュアル実習Ⅱ、デュアル基礎、デュアル演習、文書デザイン

実 施 状 況	○目的 「就職につながる 現場実習」 ○実施状況 2年生次に長期就 業訓練として、年 に2回(6～7月、 11～12月)行 われ、自分の適性 ・自分を試す機会 としている。 3年生次 2年次と同じく年 2回、同時期に長 期就業訓練を行 う。9月16日就 職活動が解禁。 進路を決定し、就 業準備をする。 ○協力 産業振興会、工業 連合会など地元企 業が協力してくれ ている。実習先は、 あまるほどたくさ んの企業があり、 生徒が足りなく らいである。	○目的 「就職を目指した 現場実習」地場産 業へのミスマッチ を少なくする ○実施状況 1年・生徒全員 2年・希望者 (選択制) 3年・就職内定者 1年 夏季休業中 Ⅰ～Ⅳ期として、 1週間ずつ4回 2年 (前期は夏季休業 中) 前期 2週間 後期 12月に2 週間 3年(就職内定者) 12月に2週間 ○協力 中小企業が多い土 地柄をいかして、 地元企業の協力を 得ている。	○目的 「基本的には就労 体験、就職のため ではないが、就職 する生徒もいる」 ○実施状況 1学年・希望者 12月に5日間、 2月に5日間の2 社を体験。 2・3学年・希望 者 2年生は火曜日、 3年生は水曜日に 週に1日、企業で 一年間を通して実 習を行う。それ以 外の期間は、学校 で事前・事後指 導、企業実習に必 要な知識・技能の 習得の時間に充て ている。夏季休業 中は実施していな い。12月以降は 発表会に向けたプ レゼンテーション 訓練、1年間のま とめに充ててい る。 ○協力 商工会議所のバックアップを受けている。	○目的 「就労体験、人間力 の向上を目指す」 ○実施状況 2年生次にデュアル システム専門コース と普通コースを選択 デュアル専門コース は原則「2・3年継 続選択」(ただし「2 年生のみ選択」・「3 年生のみ選択」も場 合によれば可) デュアル実習Ⅰ・Ⅱ ・1年間を通して週 のうちまる1日、企 業・施設で実習を行 う。1企業に施設に、 生徒1人を原則。 ・実習先は、2年生 は半期で実習先を変 更。3年生は通年。 分野ごとに実習先を 分ける。 ・前後期の2期制 で、年間約25回の 実習と数回の校内研 修と講習会を行う。 ○協力 地区のイベント等に 参加し、地元企業へ 協力を呼びかけてい る

現行教育課程の課題の集約と分析

1 本校の現行教育課程の概要について

(1) 教育課程の全体像について

本校高等部には、被服科、産業工芸科、理容科の3学科が設置され、理容科には2年課程の専攻科も設置されている。3学科はそれぞれ、更に標準学級及び重複障害学級に分かれ、それぞれの教科・科目、単位数は以下のとおりである。

各学年での履修単位数は年間30単位で、高等部本科を卒業する際は3年間で90単位の履修、また、高等部専攻科を修了する際はさらに50単位の履修が認定される。

【標準学級】

- ・ 各科目 共通教科・科目：42単位
- ・ 専門教科・科目：27単位
(この内、実習は13~21単位)
- ・ 選択教科・科目：12単位
- ・ 特別活動：3単位
- ・ 自立活動：3単位
- ・ 総合的な学習の時間：3単位

合計：90単位

【重複障害学級】

- ・ 国語：9単位
- ・ 数学：9単位
- ・ 保健体育：9単位
- ・ 芸術：6単位
- ・ 実習：30単位
- ・ 自立活動：9単位
- ・ LHR：3単位
- ・ 総合的な学習の時間：3単位
- ・ 生活単元学習：12単位

合計：90単位

(2) 職業教育に関する学校外での授業の分析について

本校における既存のインターンシップ、職場見学、交流授業（各学科ごとの交流）、校外での実習、コンクール・コンテスト等が、これまでどのような位置付けになっているか、今後の「集団学習の機会の設定、企業等での実習の機会の設定」という観点で、本校教育課程（平成23年度分の出席簿及び教育課程実施時数報告書）の課題を整理することとした。その際に、以下の「専門高校等における『日本版デュアルシステム』の推進に向けて一実務と教育が連結した新しい人材教育システム推進のための政策提言」の「教育課程の位置付け及び評価」を参考にした。

① 教育課程上の位置付け

- ア 学習指導要領に定められている専門科目の実習として実施
- イ 特別活動として実施
- ウ 総合的な学習の時間の学習として実施
- エ 学校設定科目の学習として実施
- オ 「産業社会と人間」の学習として実施
- カ その他（課題研究、実習、就業体験、進路指導、増加単位、学校行事、教科外、未定）

② 実施時期について

- ア 4～7月、イ 9～12月、ウ 1～3月、エ 長期休業（夏、冬、春）

③ 実施期間について

ア 1週間, イ 2週間, ウ 1ヶ月, エ その他の期間

2 本校の現行教育課程（平成23年度分）の現状について

本校の「職業教育に関する学校外での授業」について、行事内容、対象の学科、学年、学級種別（標準学級・重複障害学級）、実施時期、実施期間、教育課程上の位置付けについて整理した（下表）。

	行事内容	対象 学科	対象学年	学級種別 (標準・重複障害)	実施時期	実施期間	教育課程上 の位置付け	備 考
1	校内実習	全	1年	全学級	6月	1週間	総合	※1
2	インターンシップ	全	2, 3年	全学級	6月	1週間	総合	
3	職場見学	全	全学年	全学級	6月	1日	LHR	
4	各学科の交流学习	全 全 全	全学年 全学年 全学年	全学級 全学級 全学級	7月 7, 9月 6月	1日 1日 1日	実習 実習 実習	産工科 被服科 (2回) 理容科
5	各学科の校外実習	全	全学年	全学級	6,12,2月	1日	実習	理容科 (3回)
6	コンテスト大会等	産工 理容	全学年 全学年	全学級 全学級	10月 6月 8月	1日 1日 1日	時間割通 実習 なし(休日開催)	産工科 理容科 (2回)
7	産業教育フェア	全	全学年	全学級	12月	1日	実習	

※1：校内実習は、2，3年生が校外でインターンシップを実施している時期に、全学科の1年生が校内で行う実習である。

3 本校の現行教育課程における課題と考察

(1) 共通科目、専門科目、選択科目について

学部3年間での総単位数は90単位で、週の授業時数は30時間であり、共通科目、専門科目、それぞれの担当者から単位数について、増減の要望がないかの確認が必要である。特に、デュアルシステムを導入する際は、カウントをどの教科・科目等で行うのか、検討が必要である。

また、今まで以上に単位数を増やし、授業時数を増やす場合は、7時間目の増設や長

期休業中の補習等が必要となる場合も考えられ、校時表の見直しも必要となってくる。
これまでに他の研究班からは、生徒の学力の維持・向上のためにも共通科目の単位数は、減らさない方向が良いと提言も出されている。

(2) 行事内容の教育課程上のカウントについて

平成23年度の職業教育に関する授業のカウントは、総合的な学習の時間、LHR（特別活動）、実習、その日の時間割どおりの授業でカウント、休日開催のためカウントはしない、という、5パターンが存在した。

前述の7種類の行事内容について、教育課程の編成段階で時数を算定し、過不足が生じないか、また、教育課程全体においてバランスが取れているか、確認、検討が必要である。

(3) 理容科の特性について

理容科においては、厚生労働省所管の理容師養成施設としての教科課程（教育課程）も存在しており、産業工芸科、被服科と同じように学習指導要領のみを遵守した教育課程を編成できない部分がある。特に1年生において入学後6か月程度は、これまでのインターンシップを「実習」として、教育課程に編成し、カウントできない面などがある。

（「総合的な学習の時間」でのカウントは可能である。）

したがって、教育課程を編成する際は、理容科の理容師養成施設としての教科課程（教育課程）とも照らし合わせ、条件を満たすものであるかの検討も必要である。

(4) デュアルシステムの導入に際して

これまでにインターンシップや職場見学等で、受入れ先となっていた事業所がデュアルシステムの導入後も、同様に受け入れてくださるのか確認が必要である。その受入れについての要望や依頼は、いつ頃実施するのが適当かの検討も必要である。

また、平成23年度（平成24年度も）においては、標準学級、重複障害学級どちらも職業教育に関する授業は、同じ時数で実施できているが、今後デュアルシステムを導入する際に、受け入れ企業との協議の中で対象学級を検討する必要がある可能性もある。生徒の実態に応じた対応、教育課程の編成が必要となってくる。

【寄宿舎の研究】

1 研究主題

「学力の向上をめざした取り組み」

～生活の中で豊かなことば・知識を育てる取り組みを通して～

2 主題設定の理由

本校寄宿舎では現在、幼稚部 3 名・小学部 9 名・中学部 6 名・高等部 7 名・専攻科 1 名の計 26 名の子どもたちが男女各寮に分かれ、集団生活を送っている。

寄宿舎生活において、友人同士で楽しくやりとりしながら生活しているものの、自分の身の回りのことに対しての関心が薄く、そのため得ようとする情報も少なくなり、ことばの広がりにつながっていないように思われる。

そこで私たちは、まず生活の中で新聞等を活用しながら身近な情報・知識を提供し、情報源である新聞・本等に興味を持たせることで、ことばや知識の広がりを目指していきたいと考えた。また、併せて絵本や遊びを通し、楽しみながら多くのことばに触れさせる取り組みも研究していきたい。

3 研究の方法

【学校研究主題】

学力の向上

【寄宿舎研究主題】

生活の中で豊かなことば・知識を育てる取り組み

<平成 24 年度>

- ・実態把握と分析
- ・指導法の実践（新聞・絵本の活用 遊びを通して）
- ・職員研修
- ・研究のまとめ

身の回りのことばや知識の習得

自ら学ぼうとする意欲の向上

4 研究の経過

月		内 容
4	研究主題・方法の確認	
5	研究紀要年間計画	
	実践 情報の提供	アンケートによる実態把握 新聞の活用・季節の情報
7	実践 テーマ学習会	講話「先輩の話を聞こう」
	実践 職員研修	聴覚障害の理解について
8	実践 職員研修	発語について
	実践 テーマ学習会	ロールプレイング 「通院を体験しよう」
	実践 テーマ学習会	「遊びのルールを学ぼう」
9	実践 本の活用	読み聞かせ・読書時間の設定 読書コーナーの設置
12	実践 テーマ学習会	「ごみの分別を学ぼう」
2	研究のまとめ	
3	研究の発表	

5 研究の実践

(1) 情報の提供の取り組み

毎日の生活の中で身近な情報・知識を伝えていく取り組みを行った。

ア 新聞の活用

新聞を活用するにあたり，日常生活の中で新聞を読む姿がほとんど見られない現状を受け，実態把握のためのアンケートを実施した。

＜アンケートの実施＞（対象者：小学部生～専攻科生 計23名）

☆ 新聞を読んでいますか？（見えていますか？）

＜はい＞ 4人／12人（女子寮） 7人／11人（男子寮）

☆ はいと答えた人…どんな記事が好きですか

- ・エンタメ ・マンガ ・興味のあるニュースだけ ・おもしろいもの
- ・世間の話題 ・天気予報 ・スポーツ ・テレビ番組 ・「人」の記事
- ・中身を読むわけではないが見る

☆ いいえと答えた人…理由

- ・読めないから(2) ・むずかしいから ・漢字が多くてむずかしいから
- ・長くて疲れるから ・勉強があるし,仕事があるから読む時間がない
- ・テレビがあるから
- ・新聞よりテレビのニュースを見るから新聞はほとんど読まない

アンケートの結果から半数以上が新聞を読んでいることがわかった。また，男子に比べると女子は大多数が読んでおらず，新聞に対する興味の薄さが伺える。読めない・難しい・長くて疲れる等の理由を踏まえ，子どもがあげた好きな記事を参考にし，わかりやすく興味・関心が持てるよう下記の取り組みを行った。

取り組みの内容	子どもの様子
・新聞の中から子どもが興味を持ちそうな話題を選び、玄関など目に触れる場所に掲示した。また、小学部生にもわかるよう、子ども新聞も活用した。 ・記事に対してコメントの記入やミーティング時にさらに説明を加えることで、より理解を深められるようにした。 ・それぞれの職員が毎日記事を選ぶことで幅広い情報の提供に努めた。	・関心が薄かった子どもが下校後にまず掲示している記事に目を通すようになった。 ・起床後に新聞(天気予報)を見に行く姿が見られるようになった。 ・「何が書いてあるかを見るのが楽しみ」「自分では見ない記事を見るようになったのでこれからも続けてほしい」という感想があった。

イ 季節の話題

寄宿舎生活の行事の由来の掲示や説明を行い、四季折々の草花に名前を添えて飾るなど、季節についての関心や知識を深められるように工夫した。

(2) テーマ学習会の取り組み

実生活に基づいた身近なテーマを設定し、一般的な知識を学習するとともに関連することばの確認を行った。

テーマ	取り組みの内容	子どもの様子
講話 「先輩の話を聞こう」 (合同)	・本校在籍歴のある指導員の体験談をもとに、勉強の進め方や将来についての講話を行った。質疑応答を行い、学習意欲を高められるように働きかけた。	・真剣に聞いていた。 ・講話後「自分も頑張りたい」「言葉遣いが大事」など感想があった。
ロールプレイング 「通院を体験しよう」 (男子寮)	・通院の擬似体験を通し、問診表の書き方、痛みの表現、医者とのやりとりや薬について学習した。	・体験することには特に興味深く参加していた。 ・「分からないことば」についてもっと勉強したいという感想が聞かれた。
「遊びのルールを学ぼう」 (男子寮)	・子どもたちが興味のある野球やバドミントンのルール・道具の名前を学習した。 ・覚えたことばを遊ぶ中で実際に活用し定着を図った。	・実際の道具に触れることでさらに興味をもつ様子が見られた。 ・遊ぶだけでなくスポーツ番組を見るようになった。 ・ことばの勘違いによるトラブルが減り楽しく遊べるようになった。
「ごみの分別を学ぼう」 (女子寮)	・リサイクルの仕組みを図式化し、全員参加のクイズ形式で行った。 ・ごみの分別について冊子をもとに学習した。	・興味を持って楽しみながら参加していた。 ・各地域のごみの分別にも関心を示す様子がみられた。

(3) 本の活用

本に親しむ機会が増えるように、寄宿舍内に読書コーナーを設置した。興味をひくように本の配置を考慮し、図書室の協力を得ながら定期的な本の入れ替えを行った。

対 象 者	取り組みの内容	子どもの様子
幼稚部生	・就寝前の時間帯に、毎晩絵本の読み聞かせを実施した。	・興味のあるところや面白いところは何回も聞いていた。 ・読めるところは声を出して自分で読む姿がみられた。 ・自分で本を選んで持って来るようになった。
小学部生	・20時から「読書の時間」を設定し、職員が準備した本や自分が借りてきた本を読む習慣づけを図った。 ・機会を見つけて職員による読み聞かせを実施した。	・読書の習慣が身に付きつつある。本のコーナーを楽しみにしている様子が伺えた。 ・上級生が下級生に進んで読み聞かせをするなどして、楽しい雰囲気が出来てきた。
中高専攻科生	・舎室に近い場所に読書コーナーを設置し、定期的に入れ替えをしながら本の紹介をした。	・身近な場所にあることで興味を示し、借りて読書する姿が見られた。

(4) 遊びを通して

寄宿舍生活の様々な遊びの中で、「ことば」の定着を図った。

- ・「色おにごっこ」で色の名前を覚える。
- ・絵本の中での仲間探し（果物・野菜・乗り物）をする。
- ・果物や野菜・動物などの絵を見ながら、ひらがな表で文字の指さしをする。

6 研究の成果と今後の課題

幼稚部生から専攻科生の異年齢の子どもが生活する寄宿舍での取り組みは、幅広いものとなる。様々な方面から生活に密着した情報を提供することで、今まであまり興味を示さなかった子どもも新聞記事等の掲示に目をとめたり友人や職員と話題にしたり、本を手にする姿が見られるなど、子どもの興味や関心を引き出すことができてきた。

その一方で提供された情報については関心を持って見るようになったが、自ら探し学んでいこうとする状況には至っておらず、継続的な職員の働きかけが必要である。

今後は、今年度の取り組みをもとに内容の充実を図り、子どもたちの自主性を育てるような研究を行いたい。